

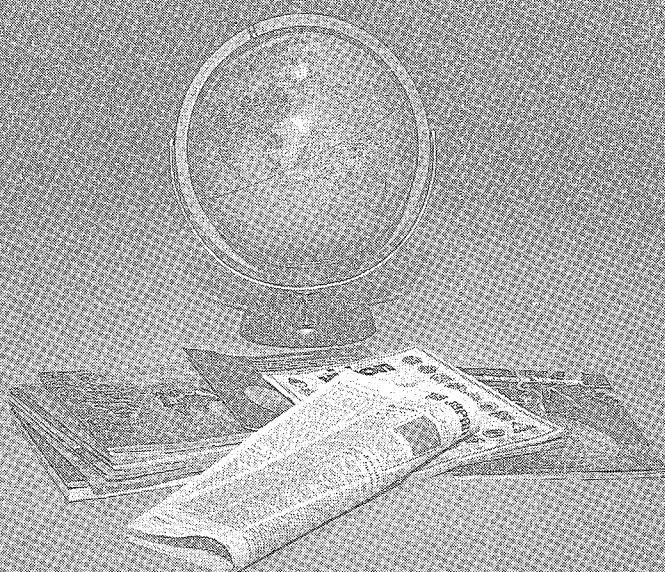
海外農業開発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

1981 12

- 海南島の農業事情
— 熱帯作物基地を訪ねて —
- 心のふるさと海南島は今……
— 「黒潮会海南島訪問考察団」日記 —

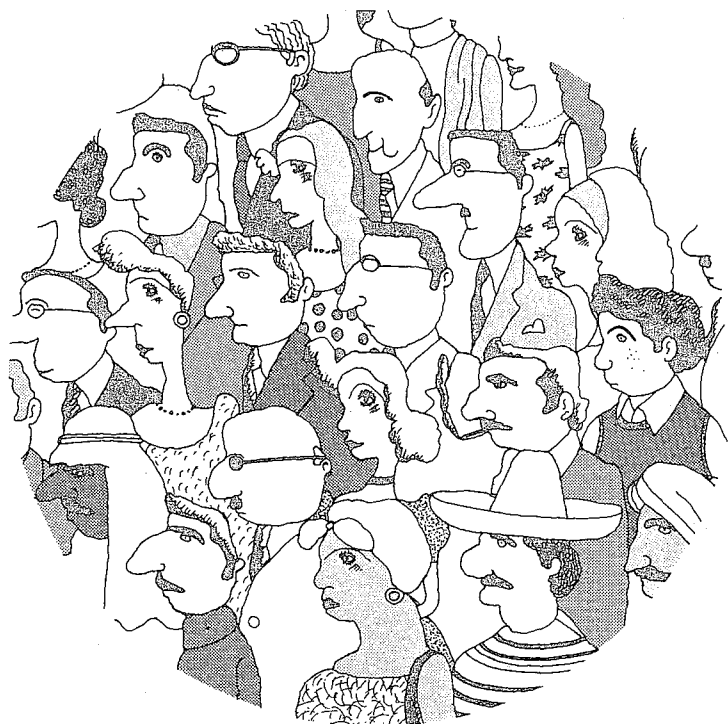
世界の人々とともに考え、語り合っています——
明日のこと。世界のこと。



いま世界は、ひとつの転換期を迎えていると思います。経済の動きだけでなく、政治も文化も、一人一人の生活や意識も大きく変わりつつあるのではないのでしょうか……。

こんな時こそ、より多くの人々とともに語り合い、協力しあってより確かな明日への道を探す——伊藤忠商事では国内はもとより、海外においても、一人一人が相互の理解と信頼を深めるように努めています。

 伊藤忠商事



いろいろな国があり、
いろいろな人が住む、
私たちの地球。
しかし豊かな明日への願いは同じ。
日商岩井は貿易を通じて
世界の平和と繁栄に、
貢献したいと願っています。

**We,
The World
Family**

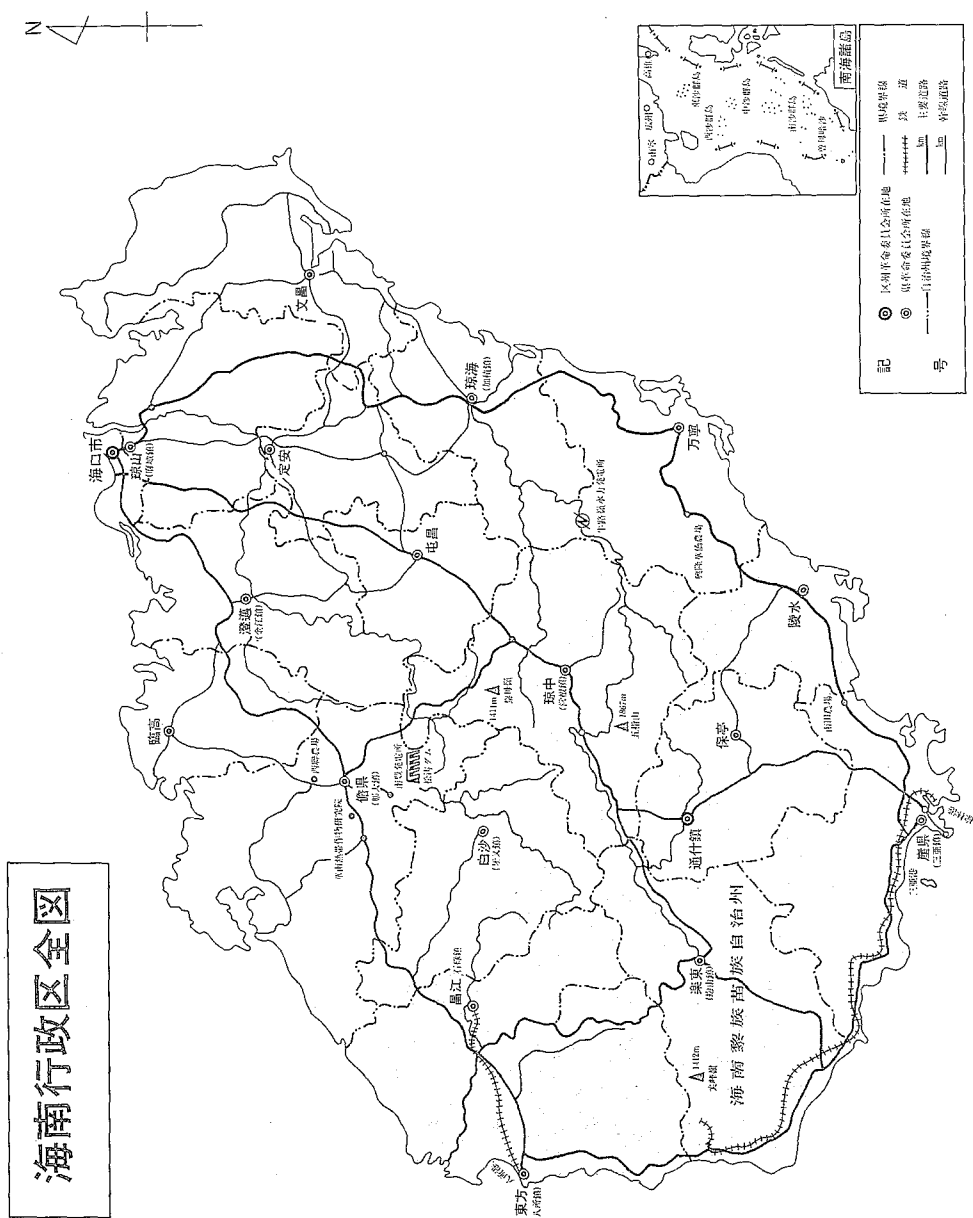
日商岩井のネットワークは
世界160都市を結びます。

 日商岩井

海南島の農業事情

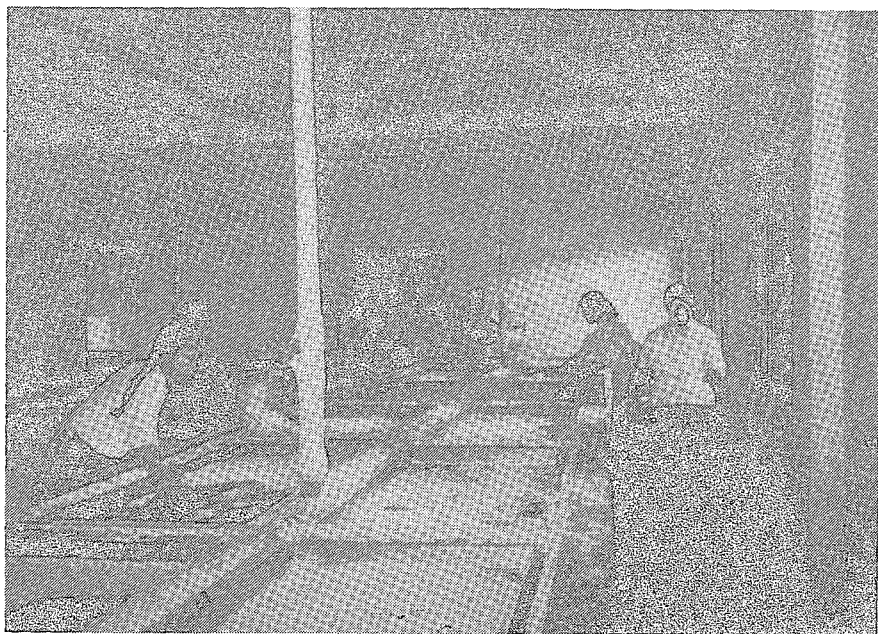
——熱帯作物基地を訪ねて——

1. はじめに	5
2. 海南島概説	7
歴 史	
行政区	
地 勢	
地 質	
水 利	
気 象	
3. 主な熱帯作物	16
ゴ ム	
ココヤシ	
コショウ	
オイルパーム	
カシューナッツ	
コーヒー	
4. 今後の農業開発と農業開発協力	25
心のふるさと海南島は今	
（「黒潮会海南島訪問考察団」日記）	32

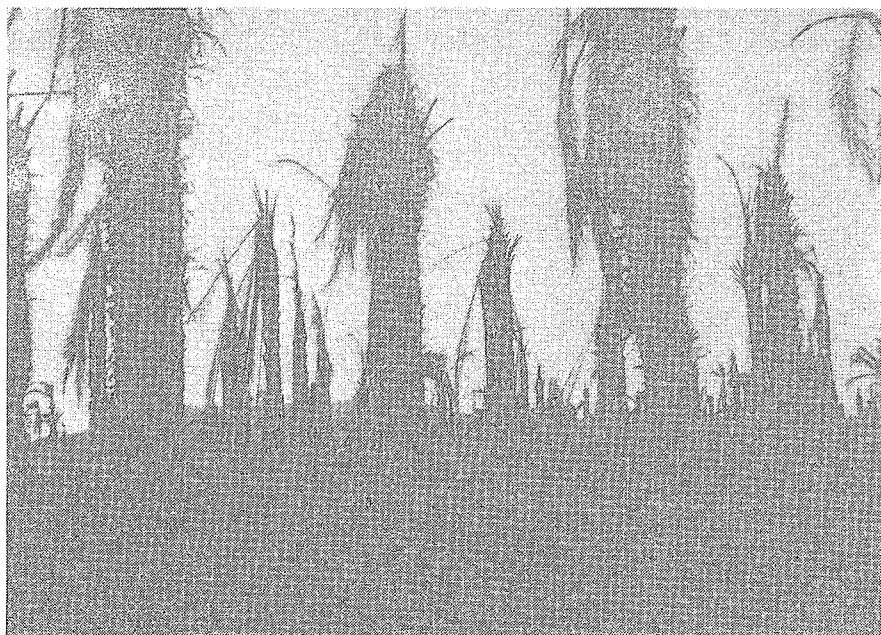




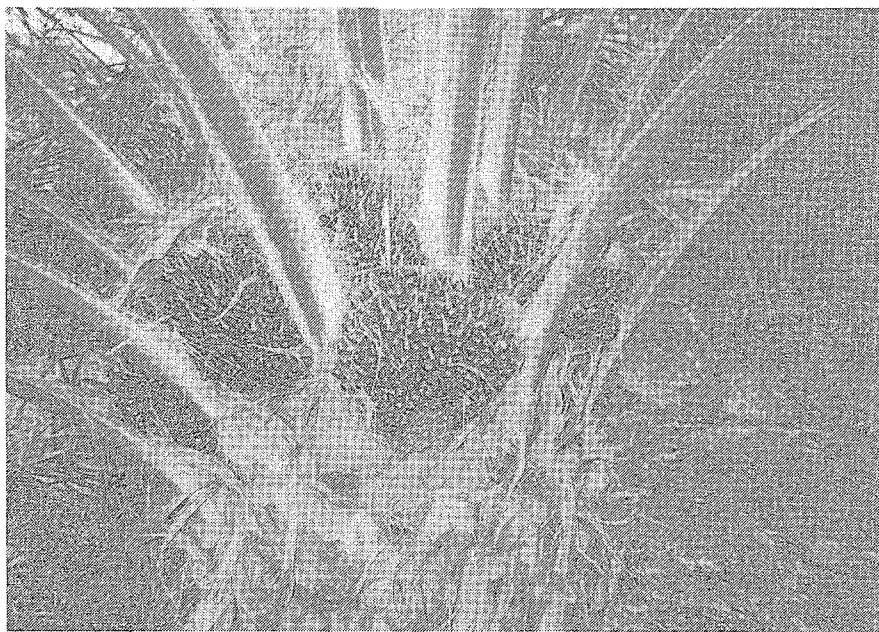
東郊人民公社（文昌県）のコブラ調整場
大半の労働者が若い娘さん



デシコブラ（乾燥）作業
（東郊人民公社）



南賓農場（崖県）のオイルパーム廃樹
60年代に植栽されたが、結実少なく失敗に終わった



同農場が新植を始めたE.G. Tenera種（植栽後5年目のもの）

海南島の農業事情

—熱帯作物基地を訪ねて—

(社)海外農業開発協会・常務理事 小林 一彦

はじめに

私が中国の南方海上に浮かぶ海南島（広東省海南行政区）を約1ヵ月間の予定で訪れたのは今年7月、ちょうど2期作目の田植えの最中であった。同島は戦後ずっと中国の南方海上防衛拠点として門戸を閉ざしてきたが、80年7月に国務院（内閣）が同島を新たな熱帯農林業とそれに関連する軽工業を中心とする自然条件を生かした経済基地にする、そのために外国資本、外国技術の導入を図るとの方針を決定し、対外協力を積極的に求め始めてきている。諸外国が台湾にほぼ匹敵する中国第二の面積をもつ海南島に関心を示すのは、この開放政策への転換に加え、鉱物資源、熱帯作物の宝庫としての期待があるからであろう。79年末ごろから外国企業の同島視察が増えだした。これまでにアメリカ、フランス、イギリス、西ドイツ、オーストラリア、マレーシア、シンガポール、タイ、それに香港をはじめとする東南アジア華僑が次々と民間視察団を送り込んでいるという。わが国からも今年2月に日中経済協会（下河辺 淳団長）が、3月に日本国際貿易促進協会（春名和雄団長）が同島の開発にかかわる経済、技術協力の可能性を検討するための視察団を派遣した。また、大手商社の丸紅は80年実績で同島産のゴマを1,000t、カシューナッツを100tそれぞれ補償貿易により輸入するなど、すでに経済活動に入っている。

海南島には島内1周と島の斜め右上の海口市から同左下に縦断する主幹道路がある。私はその両主幹道路を中心に招待いただいた海南国際信托投資会社の施雲梯科長はじめ海南熱帯作物局、同林業局等の専門家の先生方と共に、車で延べ3,000km弱を走り、各地の農業事情をいわゆる点と線で見聞する機会を得たわけだが、同島の農業事情を概括するには、いまひとつはつきりしない。と言うのは、今回、海南島の農業調査をするにあたり、事前に私なりの調査項目を作成し、現地へ赴いたわけだが、実際には短い期間に全島を回ったという制約もさることながら、整理、系統だった記録資料を全くといっていいほど入手できなかったことにも起因する。訪れ、面談した各地の国営農場、農村人民公社、関係政府機関の担当者及び専門家は、こちらの質問に対し、きわめて好意

的かつ明瞭に答えてくれたが、例外を除いては資料を持たずに説明ぶりであったため、仕方なくそれらの全てをメモするという難作業に終始しなければならず、しかもそれを宿舎に戻って整理、計算してみると、基本単位が間違っていたり、同じものでもA地区とB地区で聞いた数字に整合性がなかったりで、混乱させられることしばしばであった。当然、各種の統計がそうであるように、年度別、月別あるいは地域別に数字が並ぶようなもの（例えば土地の利用状況、各作物耕作面積、肥料投下量、農作物の生産価格——等の推移）は、手元に資料を置かずに説明することは難しい。したがって本稿は、通常の農業調査で行うべき主要項目の欠落、掘り下げの不足等、不明確、不整合な面をそのまま残している。この点は、まさに本稿の資料的な価値を低いところにとどめるものであるが、同時に諸外国の協力を得て農業開発事業を推進する場合の海南島側のアキレスケンになるだろうことも指摘しておく必要がある。

海南島における熱帯農業は、訪れた国営農場、人民公社で多くの責任者が栽培成績の良好なことを強調していたが、国際水準からみると、おしなべて収量が低く（作物によっては3分の1）、その品質もコショウ、ゴマ、カシューナッツなどの1部の作物を除いて、まだ実験段階にあるように思われる。全島には現在107カ所の国営農場があり、ゴムを中心にコショウ、コーヒー、ココヤシ、オイルパーム、熱帯果樹などが栽培され、約80万人の労働者が働いている。また、熱帯性経済作物の栽培面積は人民公社を含めると9万haに達する（コメなど食糧生産面積は8万ha）という。生産されたこれらの作物の大半を輸出に回し、外貨獲得の源にしようとするからには、収量の増加、輸出品としての市場開拓がされなければならない。この点については海南島の関係者よりもむしろ国家基本建設委員会など中央の方が認識しているようである。一方、協力の可能性を探る諸外国の立場にたてば品質、量、輸送手段等も問題になってくる。品質は価格と相関関係にあり、量も輸送価格にはねかえる。また、輸送については島内ではトラック輸送ができることから現在のところ支障はないが、港は西海岸の八所港以外に万トン級の規模をもつところがない。

これらの課題は今後、海南島の農業開発に諸外国がゴーのサインを出せるか否かの重要なチェックポイントになるであろう。

海南島概説

1. 歴 史

昭和14年2月10日、日本軍は海南島に進駐し、同20年の敗戦をむかえるまで約6年半にわたり同島を支配下においた。しかし、近代に入ってから海南島の歴史の中では、これは唯一例外の武力占領であって、以前より今日までずっと中国の領土として存在してきている。

歴史の伝えるところによると、漢の時代(紀元前110年)に初めて珠崖・儋耳の2郡を置き、5県を統轄したとある。その後、しばしば治政上の変更をみるが、清の時代には瓊・崖2道を置き、儋・萬・崖の3州ならびに瓊山・澄邁・安定・文昌・会同・樂会・臨高・昌化・陵水・感恩の10県に分けた。さらに清末には3州を改めて13県とした。

中華民国になってからも当初は会同を瓊東へ、昌化を昌江へ、萬県を萬寧へと呼称を変えただけで、他はそのまま継承。その後、民国10年(1921年)になって瓊・崖の2道を廃し、同15年に瓊山県の海口港を切り離し、特に海口市とした。

第2次大戦後は、国共内戦で勝利を得た共産党による中華人民共和国の誕生で、広東省海南行政区という全国でただ一つの行政単位になる。

2. 行 政 区

イ) 地 位

広東省に属する海南行政区は、本島南半分の自治州(海南リ族・ミャオ族自治州=州都は「通什鎮」)と同北半分の1直轄市(海口)、17の県および西沙、中沙、南沙の各群島である。

海南島の管理主体は、国、行政区、自治州の3つからなっている。ただし、自治州は基本的には広東省にある珠海などの経済特区と同格であるものの、開発計画を決めたりする場合には、政府の意向にそわねばならぬので、実際面における自治州としての権限範囲はきわめて小さい。

ロ) 人 口

現在、同島の総人口は約540万人(リ族が61万、ミャオ族が2万、チワン族が5,000、回族が3,000、残りが漢族)で、うち農村人口が350万。ただし、農村人口と農業人口とは一致しない。これは全島に107カ所ある国営農場(主としてゴム栽培をしている)の人口を農村人

口としてかぞえていないことによる。この農村人口を除いた人口では、国営農場および漁業、塩田関係、林業、牧畜が大部分を占め、商工業、鉱業従事者はきわめて少ない状況である。しかし、海口市などの一部の都市部と農業地帯を比較すると、前者の過密、後者の過疎といった状態が歴然としており、既存一次産業は人口吸収力という点で、弾力性に欠けている。80年時における農林牧業の土地利用面積は約200万haである。

ハ) 交 通

島内交通は主に自動車が使われており、海南島と大陸間の交通は海、空の2つ。全海南島で車が走れる道路の総延長は約14,000Km(小さな村道は含まれない)。

全島のトラック保有台数は80年末の推定で約8,700台で、その積載総能力は同2,400トン程度である。

ニ) 港

主要港は、①八所港、②海口港、③三亜港 — の3つ。最大規模をもつ八所港は万トン級と5,000トン級の船が接岸できるバースを一つづつ備えている。海口港は5,000トン級、三亜港は3,000～5,000トン級の接岸が可能である。

全島の積荷扱い量は、80年実績530万トンで、このうち鉱石が320万トンを占めている。この量は上記3主要港と他の7つの小港の分が含まれているが、3主要港以外の取り扱い量は極めて少ない。いずれにしろ全島の港の能力が小さいため、80年時には輸出入(主に輸入)できない貨物が100万トンにも達したとみられている。

3. 地 勢

海南島は四面海に囲まれた台湾に次ぐ中国第二の面積をもつ島である。南シナ海の北西隅に位置し、東は南シナ海を隔てて遙かにフィリピンを望み、西南はトンキン湾を隔ててベトナムに対し、北は南海海峡を隔てて雷州半島に面している(東経 $108^{\circ}36'$ ～ $111^{\circ}02'$ 、北緯 $18^{\circ}09'$ ～ $20^{\circ}02'$)。同島が古くから台湾と共に中国の両眼と形容されるのは面積、風土が台湾と相似する島だからである。

亜熱帯圏に属する同島の年間平均気温は 22°C ～ 26°C 、年間平均日照時間は1,746.6～2,661.5時間、年間降雨量は964～2,440mmである。

全島の総面積約34,000 Km^2 のうち台地丘林地帯と盆地が90%を占める。概して海拔500m以上の高原地帯は西南部に集中し、東北部に同500m以下の丘陵、台地、盆地が形成されている。また黎母山脈がほぼ中央を東西に走り、島を二分して南北に分水嶺を形づくり、北方の平野地と

南方の山岳地帯とを区分している。ただし、山岳地帯といっても300m以下の起伏が多く、五指山の標高1,867mを除いては1,000mを超えるものは少ない。

河川は黎母山系または五指山系に源を発し、放射線状に四方へ本流が伸び、多数の小河川が分岐している。その主なものは南渡江、万泉川（嘉積溪）、昌化江の3河川である。

4. 地 質

全島を通じて著るしく火成岩が発達しており、水成岩は比較的小範囲に留まっている。火成岩は噴出岩と深成岩に大別できるが、前者には淡紅色の多孔状玄武岩・黒色球形多孔状の橄欖玄武岩・黒色か淡紅色の安山岩等があって、中でも玄武岩の分布が最も広い。北部平原地方は小火山から噴出した玄武岩の熔岩台地になっており、一部の露頭したところでは小規模ながら石材利用に切り出している。また安山岩については臨高県の高地に散在しているのが確認できた。

深成岩は花崗岩・煌斑岩・石英斑岩等が存在し、特に中南部山岳地帯に花崗岩の発達が著るしく、全島の3分の2以上の面積に及んでいる（儋県・瓊海を結ぶ線以南は丘陵地の紅色砂岩地帯を除いて、概ねこれに属しているようだ）。南部沿岸の藤橋・三亜・崖県一帯は花崗岩のみで、この一帯以西の梅山・九所付近は更に塩基性が強く表われている。一方、水成岩は文昌県東北部の花崗質砂岩または儋県（那大）の西北部、臨高県南部地帯の紅色砂岩等を数える程度である。

5. 水 利

海南島には、大河川が3本（南渡江、昌化江、万泉川）存在し、この流域面積の合計は約1,600 Km²。これは同島全面積34,000 Km²の約半分にあたる。

同島のダム建設は、1958年以降、大躍進のかけ声の中で積極的に推進され、現在では総貯水容量で46億m³に達した。灌漑面積に換算すると約36万haをカバーできる容量だが、末端の用水路未整備もあって、実際に灌漑が行われているのは約24万haにとどまっている。

全島に建設された主なダムとして、松濤、青寧、長芽、石碌等をかぞえるが、規模では松濤ダム（松濤水庫）が群を抜いている。

（松濤ダム）

南渡江をせき止めたもので、儋県に所在する。1958年着工、62年に完成した農業灌漑に主力を置く多目的ダム。同ダムの建設には、いわゆる人海戦術をもって、延べ6万人が投入されたという。

現在の灌漑地区は、同島の西北部にあたる①海口市、②儋県、③臨高県、④澄邁県、⑤瓊山県一の1市4県で、カバー面積は約18万haである。

満水時の貯水量は30億 m^3 （ただし有効使用水量は27億 m^3 ）。例年9月に最高水位を示し、雨季のはじまる直前（6月初旬）には8億 m^3 程度へと減少する。

満水時の水面面積は1,480 Km^2 。同時点での平均水深は75mである。

松濤ダムの潜在発電能力は3万7,000キロワット／日といわれているが、現在の発電能力は2万3,000キロワット／日前後。海南水力発電局に所属し、儋県那大鎮南20Kmに位置する南豊発電所が大半の2万キロワット／日を占め、残りは下流にある8つの発電所によるものである。同ダム水系での発電量は、80年実績で全島発電総量の60%を占めている。

※ 同ダムには自然のカニ、エビ、36種前後の魚があり、これらの魚獲で年25万元（80年実績）ほどの収入があるという。

主な河川概要

河 川 名	長 さ (km)	流 域 面 積 (km ²)	年間流量(百万 m^3)	流域面積当りの 年 間 流 量
南 渡 江	311	7,176.5	6,591	918,000(m^3/km^2)
昌 化 江	230	5,070	3,721	734,000
万 泉 川	163	3,683	5,235	1,421,000

6. 気 象

農業の状態を正確に観察するうえで気象の把握は重要である。

イ) 気 温

気温は同島の南北で大きな差は認められないが（表1、図1参照）、全体として月別の平均気温をみれば、冬期の気温は相当に低く、夏期は著しく高い。つまり、12、1、2月の3カ月は気温が低く冬の状態を示し、5月から9月の5カ月間は夏の状態になる。これを図2の台湾の台南の気温と比較すると、総じて高温で夏がいくぶん長い観があるが、マニラのそれと比較すると全くの異なりをみせ、気温の点では同島は熱帯性というより亜熱帯性に属する。特に最高最低の気温は海口市では最高28.6℃以上に上り、最低は16.9℃、崖県でも同29.0℃、20.4℃を示すなど寒暖の隔差が大きい。なお日照時間は表2のとおりである。

表1. 月別平均気温 (1953年—74年平均)

(5)

地区 期 月	海 口 市			瓊 海 県			崖 県			東 方 県			瓊 中 県			平均				
	上	中	下	平均	上	中	下	平均	上	中	下	平均	上	中	下		平均			
1月	169	169	174	17.1	16.9	17.8	18.5	17.7	20.6	20.4	21.5	20.8	17.6	18.2	18.4	18.1	15.5	16.0	17.0	16.2
2月	17.7	18.5	18.7	18.3	18.3	19.5	19.4	19.1	21.3	22.3	21.3	21.6	18.3	19.5	19.6	19.1	16.4	18.2	18.3	17.6
3月	20.3	21.4	22.6	21.4	21.2	22.1	23.1	22.1	23.3	23.8	25.3	24.1	21.1	22.1	23.2	22.1	20.1	20.8	22.4	21.1
4月	24.0	24.6	25.8	24.8	24.1	25.0	25.9	25.0	25.5	26.3	27.0	26.3	24.4	25.9	26.9	25.7	22.7	23.5	24.6	23.6
5月	26.9	27.5	27.7	27.4	27.0	27.6	27.7	27.4	27.8	28.4	29.0	28.4	28.3	28.7	28.8	28.6	25.6	26.1	26.0	25.9
6月	27.5	28.3	28.5	28.1	27.5	28.2	28.3	28.0	28.2	28.4	28.6	28.4	28.7	29.6	29.2	29.2	25.9	26.5	27.0	26.5
7月	28.6	28.5	28.1	28.4	28.4	28.4	28.1	28.3	28.6	28.3	28.8	28.6	28.7	29.1	29.0	28.9	26.7	26.5	26.4	26.5
8月	28.0	27.6	27.4	27.7	27.9	27.4	27.2	27.5	28.1	27.8	28.2	28.0	28.4	27.9	27.4	27.9	26.1	25.8	25.6	25.8
9月	27.2	27.0	26.4	26.9	27.0	26.8	26.1	26.6	27.3	27.4	26.9	27.2	27.4	27.1	26.4	27.0	25.2	24.8	24.3	24.8
10月	25.8	24.9	23.6	24.8	25.4	24.5	23.5	24.5	26.4	25.9	26.0	26.1	25.9	24.7	24.0	24.9	23.7	22.9	21.9	22.8
11月	23.3	22.0	20.5	21.9	23.3	22.0	20.5	21.9	24.9	24.2	23.2	24.1	23.8	22.0	20.5	22.1	21.2	20.5	18.9	20.2
12月	19.0	18.6	18.3	18.6	19.5	19.2	18.8	19.2	22.6	22.0	22.1	22.2	19.9	19.5	19.1	19.5	18.0	17.4	17.0	17.5
年平均				23.8				23.9				25.5				24.4				22.4

出所：広東省海南気象站

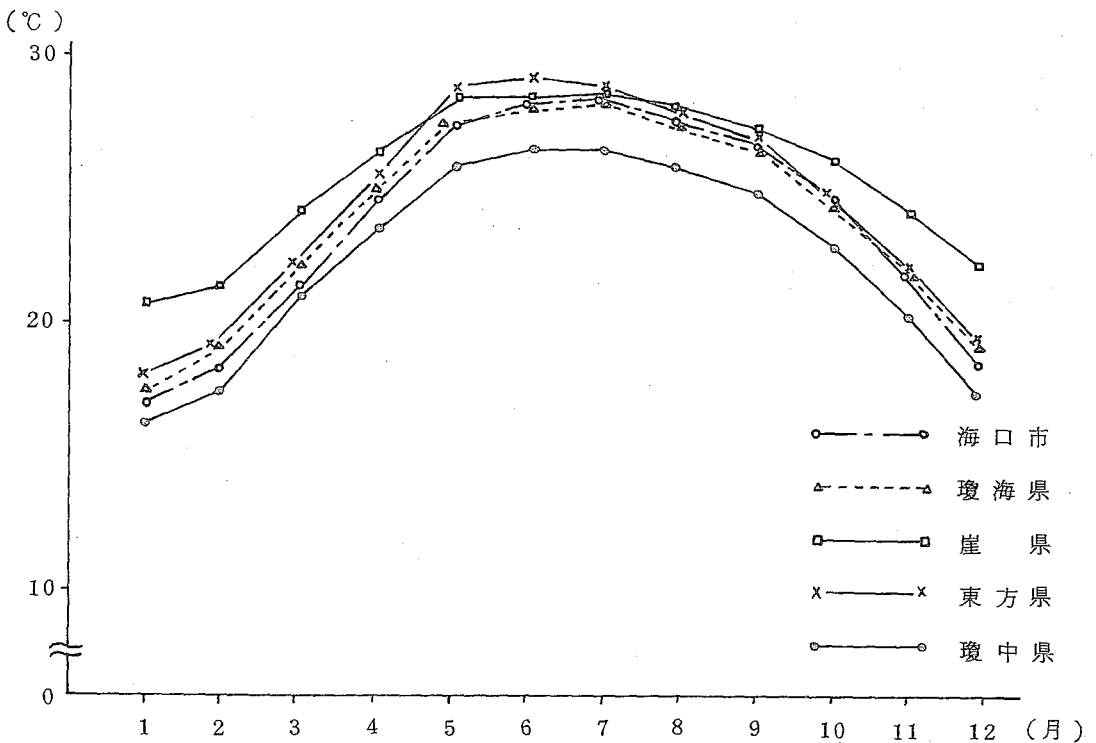


図1. 月別平均気温 (表1 から作成)

表2. 日照時間（1953-74年平均）

（時間）

地区 期間 月	海 口 市			瓊 海 県				崖 県				東 方 県				瓊 中 県								
	上	中	下	平均	上	中	下	平均	上	中	下	平均	上	中	下	平均	上	中	下	平均				
1月	3.9	5.0	4.2	4.4	3.1	4.9	4.1	4.0	5.7	6.8	6.5	6.3	5.8	7.1	6.4	6.4	2.9	4.3	4.1	3.8				
2月	4.0	4.2	3.8	4.0	3.4	4.4	2.9	3.6	6.0	6.5	5.2	5.9	5.9	6.5	5.2	5.9	3.0	4.0	3.6	3.5				
3月	4.6	4.9	5.0	4.8	4.8	4.6	4.2	4.5	6.4	6.3	5.4	6.0	6.0	6.2	5.7	6.0	4.4	4.6	4.8	4.6				
4月	5.9	5.7	6.9	6.2	6.0	5.5	6.9	6.1	6.3	6.8	7.6	6.9	6.5	7.4	8.3	7.4	5.7	4.9	6.5	5.7				
5月	7.5	8.2	7.7	7.8	7.3	8.1	6.7	7.4	7.8	8.6	7.8	8.1	9.3	9.6	9.2	9.4	6.7	6.9	6.0	6.5				
6月	6.1	7.4	8.5	7.3	5.9	7.3	8.8	7.3	6.3	7.1	8.1	7.2	8.6	8.9	9.1	8.9	4.6	6.0	6.7	5.8				
7月	9.2	8.6	7.9	8.6	9.2	8.1	6.8	8.0	8.9	8.0	7.5	8.1	9.2	8.8	8.8	8.9	6.9	6.5	6.4	6.6				
8月	7.3	6.9	7.2	7.1	7.6	6.8	6.5	7.0	7.3	6.8	6.8	7.0	7.8	7.2	6.8	7.3	6.2	5.3	5.6	5.7				
9月	6.9	6.9	6.2	6.7	6.0	6.9	6.1	6.3	5.9	6.9	6.6	6.5	7.0	7.5	7.4	7.3	4.6	5.6	4.8	5.0				
10月	7.1	6.5	6.3	6.6	5.8	5.7	4.8	5.4	6.7	6.9	6.6	6.7	7.9	7.5	7.9	7.8	4.1	3.8	4.0	4.0				
11月	6.4	5.0	5.8	5.7	5.0	4.2	3.9	4.4	7.0	6.8	6.0	6.6	7.8	7.0	6.9	7.2	4.3	3.5	3.0	3.6				
12月	4.5	4.8	4.5	4.6	3.9	4.0	3.4	3.8	6.7	6.0	6.5	6.4	6.8	6.6	6.9	6.8	3.3	2.8	3.5	3.2				
年平均				6.2					5.7					6.8					7.4					4.8

出所：広東省海南気象站

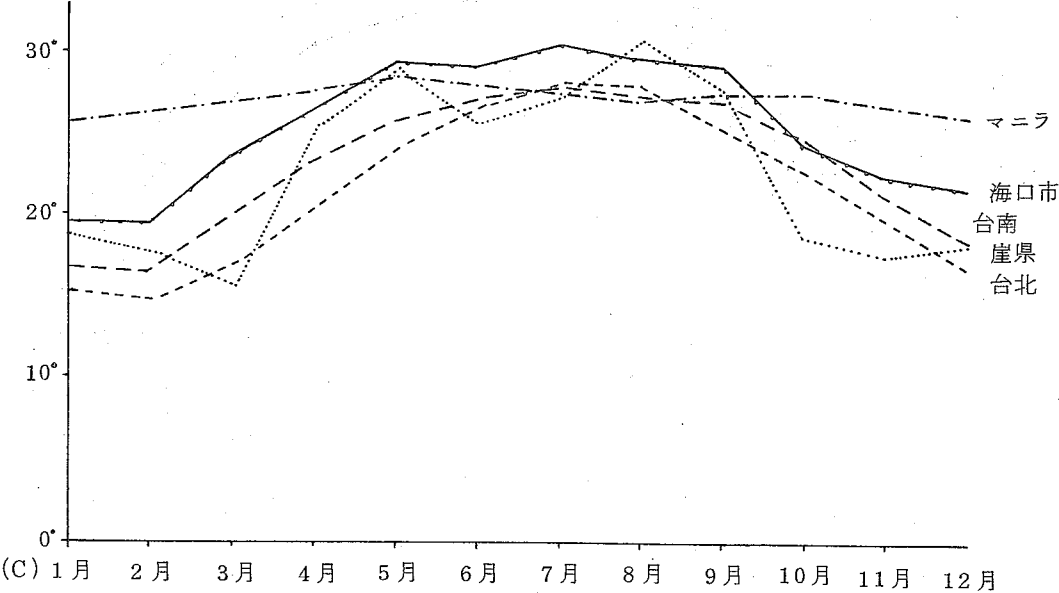


図2 各地月別気温の比較図

口) 雨 量

世界における降雨状態の分布をみると、赤道付近に多雨地帯が存在し、南北各30度付近には小雨帯があり、特に海岸地方は山間部に比べて雨が多い。南北緯30度以内の多雨帯の中に位置する海南島は当然雨量は多いが、地域により著しい差が認められる。表3が示すとおり、年間降雨量は東方島の1,054.7mmに対し瓊中県では2,441.1mmと2倍以上の差がある。また年雨量及び雨量分布も年によって随分と違っている。全島的にみた年降雨量は1,000mmから2,500mmの間である。

表3 月別降雨量 (1953年～74年平均)

(mm)

地区 期間 月	海 口 市				瓊 海 県				崖 県				東 方 島				瓊 中 県			
	上	中	下	月合計	上	中	下	月合計	上	中	下	月合計	上	中	下	月合計	上	中	下	月合計
1月	9.1	4.5	11.7	25.3	17.1	10.2	17.3	44.6	1.2	2.0	3.8	7.0	1.8	0.4	4.3	6.5	10.0	6.7	15.5	32.2
2月	7.8	11.2	15.9	34.9	11.9	14.8	17.9	44.6	1.3	3.8	5.7	10.8	5.9	5.0	4.6	15.5	10.8	12.5	17.0	40.3
3月	14.1	15.0	22.6	51.7	17.3	31.0	27.9	76.2	3.5	10.6	8.3	22.4	3.1	4.0	4.8	11.9	18.7	10.3	18.6	47.6
4月	15.5	39.7	34.6	89.8	21.1	51.4	52.8	125.3	3.4	15.7	15.7	34.8	4.8	12.3	10.3	27.4	17.5	47.8	40.7	106.0
5月	64.5	63.3	66.1	193.9	33.8	57.0	92.9	183.7	25.6	28.2	87.9	141.7	13.8	19.1	42.6	75.5	56.6	68.9	128.9	254.4
6月	88.1	80.2	85.0	253.3	117.5	69.8	75.7	263.0	51.8	55.1	59.9	166.8	48.3	40.8	44.0	133.1	100.2	49.9	70.1	220.2
7月	48.1	66.9	77.1	192.1	46.1	47.5	66.3	159.9	45.2	49.2	41.8	136.2	63.7	35.6	18.8	118.1	83.9	77.4	80.4	241.7
8月	73.0	96.5	71.3	240.8	88.0	123.8	106.2	318.0	48.4	81.1	102.3	231.8	35.2	145.0	147.4	327.6	78.9	109.7	117.2	305.8
9月	110.5	81.4	116.6	308.5	111.5	108.9	159.4	379.8	93.2	61.3	104.7	259.2	79.1	65.8	75.3	220.2	126.9	137.1	189.8	453.8
10月	51.1	66.0	51.5	168.6	92.1	128.9	74.8	295.8	78.5	69.5	30.3	178.3	21.0	42.3	17.8	81.1	148.9	148.2	157.1	454.2
11月	41.6	53.5	19.3	114.4	47.8	73.7	35.3	156.8	13.1	11.9	10.4	35.4	7.9	11.3	5.3	24.5	82.6	65.6	70.2	218.4
12月	16.9	11.1	11.8	39.8	29.2	20.0	25.1	74.3	2.3	5.0	1.9	9.2	2.8	8.9	1.6	13.3	28.3	21.5	16.7	66.5
年間	1,731				2,122.0				1,233.6				1,054.7				2,441.1			

出所：広東省海南気象站

年を通じての雨量の分布状態は、傾向として1，2，3月の4カ月あるいは4月も入る5カ月間が雨量少なく、いわゆる乾期の状態を示す（全く降雨をみない月もある）。他の月は雨期の様相をみせ、雨量の大部分はこの時期に降る。しかし雨期中でも降雨のきわめて多い月とそうでない月とがあり、その分布には2頂曲線または3頂曲線がみられ、一定の型を示さないようである。

海南島の年雨量の分布は熱帯性であるが、赤道からやや北に寄るため、雨期は夏期1回となるところが、実際にはいくぶん熱帯性の特徴を示して年2回の多雨を迎える時期があるので、降雨の分布も2頂ないし3頂曲線になることが多い。

表4 豪雨頻度（1日80mm以上）

1953年～74年平均（％）

地区 期間 月	海口市			瓊海県			崖 県			東方県			瓊中県		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3月	0	0	0	0	5	9	0	6	0	0	0	0	0	5	0
4月	0	8	0	0	9	5	0	0	0	0	0	0	5	5	0
5月	8	13	17	5	5	50	13	0	13	0	0	5	10	5	20
6月	13	8	25	29	0	19	19	13	6	24	15	15	20	15	10
7月	8	0	4	19	0	9	13	13	6	15	5	5	5	10	10
8月	25	21	8	24	29	19	0	0	25	0	48	33	10	35	20
9月	17	13	38	15	24	48	0	6	38	24	5	9	20	35	75
10月	17	17	8	19	52	15	25	19	13	0	9	0	35	60	35
11月	13	8	0	5	24	5	0	0	0	0	0	0	25	5	15
12月	4	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

出所：広東省海南気象站

次に降雨の状態だが、雨期における降雨は南部、北部ともに同一性質のもので、雷と暴風をともなうことが多い。各地の豪雨の頻度は表4に示す通りで、数日間降り続くときは、大小河川を氾濫させることもあるようだが、普通は土砂が流される程度で止まるそうだ。

ハ) 台 風

海南島を襲う台風は7月から10月の4カ月の間に集中して発生する。表5に示すように台風といわれる17m以上のものは、この時期に全島に及ぶが、30m規模のものとなるとその発生率が

表5 台風発生率(1953~74年平均)

ビューフォード風力 17.2~32.6 m (%)															
1月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	0	5	5	0	0	5	5	0	9	0	0	5	0	0	0
6月	0	0	5	0	0	5	0	0	5	5	5	5	0	0	0
7月	14	5	5	5	5	5	18	9	5	18	9	5	0	0	0
8月	9	9	14	5	14	14	0	9	5	5	23	14	0	7	7
9月	9	5	5	9	9	9	9	9	5	14	14	14	7	7	7
10月	23	9	5	14	9	5	14	14	5	18	9	5	7	20	7
11月	5	0	0	5	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0
12月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ビューフォード風力 32.7 m以上 (%)															
1月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0
7月	5	5	5	5	0	0	5	0	0	9	0	5	0	0	0
8月	5	9	9	0	5	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0
9月	5	0	5	0	5	5	5	5	5	5	9	5	0	7	0
10月	5	5	0	0	0	5	9	0	0	5	0	0	0	0	7
11月	5	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

出所：広東省海南気象站

下がり、さらに35m前後のものになると、めったに上陸しないという。私が同島を訪れていた7月の初旬には35m前後の超大型の台風が同島の東海岸、南部を襲い、ゴム、モクマオウの栽培地帯に甚大な被害を与えたが、現地の人々によるとこのような規模のものは30年ぶりとのことであった。

※海南東にも一定の季節風があって、冬期は乾燥した風が北東より吹き、夏期は東南または西南から湿潤の風が吹く。冬期の風は常に吹くが、夏期は日中夜間ともに無風状態になることが多い。気候はこのような季節風の影響を受けて、夏は大陸と異なりやや温和なものとなるが、冬は大陸南部の影響を受けることが大きい。

中央山脈中では山風ともいえる強い北風があり、夜を通じて吹き荒れることもあるが、4月から6月にかけては、この風も止むという。

主な熱帯作物

1. ゴム

海南島におけるパラゴム栽培の歴史は長い。最初にゴムが導入されたのは1902年。同島出身の華僑がマレー半島から僅かではあるが苗木を持ち帰り、儋県の洛基に試植している。続いて1906年には瓊(王京)海出身の華僑が瓊中県落河溝に約16.7 haを開拓して瓊安壑植公司を設立し、4,000株を試植した。これは同島での本格的なゴム栽培の始まりで、翌1907年には儋県(那大)にもゴム栽培のための僑興公司が設立される。1915年に入ると、これら両公司の生ゴム生産は合計で250 Kg, 同16年550 Kg, 同17年900 Kg, 同18年1,500 Kgと年を追って増え続け、輸出先であるシンガポールでの同島産ゴムは、品質、価格の両面でマレー産と同等の評価を得る発展をしたという。この成功は海南島のゴム栽培に一種の熱狂時代をつくり出す。在島人に加え文昌県出身者を中心とする10余万にも及ぶ東南アジア出稼ぎ組(多くはマレー半島におけるゴム園従事者)の帰島もあって、ゴム栽培のための新規開墾は各地で進み、第一次世界大戦の勃発による国際ゴム価格の暴落をみるまでこの傾向は続く。

儋県(那大)と瓊海県(石壁)の両地域は当初よりゴム栽培の中心地域である。中華人民共和国の誕生時(1949年)には、全島に644カ所の大小ゴム園が存在し、その総面積約2,800 ha, 樹数100万株, 年ラテックス生産量200トンという記録があるが、1950年以後の増産施策で栽培面積は年々拡大され、1980年には同島の栽培面積約21万3,000 ha, 年生産量7万1,000 t(1 haの平均生産量3.3 Kg)に達した。

※マレー半島での高収量ゴム樹1 ha当たりの平均生産量は75年度では1~1.5 tである。

海南行政区熱帯作物局による、同島におけるゴム栽培に関する管理要点等は次の通り。

1. 土地 これまでの栽培結果から最も適した品種は「海墾1号」といえる。本品種は島の東北部の赤色土壤地帯で生長率が良く、生産量も高い。風速35 m前後の台風にも十分耐え得る。採液の通りの切り口を細くするよう徹底すれば更に産量は増える可能性がある。東北部では樹株の距離を2.5×9 mとうね間に対して株間を極端に狭めた密植で、1 ha当り420株植えつける。
※1ムーを0.0666 haとして、栽植密度2.5×9 mを計算すると1 ha当り444株となる。

この間隔ならば日照をさまたげず、耐風力を保持できる。

南部地帯はマレーシアの「RRIM600」が主であるが、「海墾2号」等の新品種も適する。

中部地帯は2.5×9mの間隔にインドネシアの「PR107」が適し、西部地帯は「海墾1号」, 「RRIM600」, 「PR107」が適し、比較的乾燥した地帯では「GT1」を植えていく方針。

2. 選種育苗 8～9月に得た優良母樹からの種子を苗床にまくが、この作業は10月中旬以前には終らせておくべきである。これをおくらすと冬期に損害をこうむる危険がある。播種の標準間隔は15cmで3cmの覆土を行う。
3. 墾地と定植 本畑の選定には、まず測量設計が必要である。森林地および草原地では、初めに防護林界を設けてから植穴を掘ること。一般に1ha当りの植え付け数は420～630株。本畑への植え付け時期は5～6月、おそくとも8月末まで。
4. 生産管理 管理の主は土壤水分と養分の保持である。根が露出せぬよう十分に覆土し、除草、施肥を行う一方、病虫害防除、土壤流亡防止などの管理と保護をはかる。
5. タッピング タッピングナイフを用い、形成層より奥へ切りこまないこと（冬期間は特にこの点に注意する）。浮液の浸出は早朝が最も多いので、通常明け方にタッピングを行なうが、午前8時の気温が15℃というような低いときは、タッピングを避ける。

2. ココヤシ

同島のヤシ栽培の歴史は2,000年以上といわれるが、本格的に栽培されるようになったのは、ここ80年以内のことである。同島出身の東南アジア華僑が多数種苗を輸入したという因果関係もあって、華僑の最も多い文昌県清瀾港付近を中心に瓊京、万寧、陵水、崖の各県海岸地方に広がっている。これは土壤、気候および雨量などの条件が同島の中ではヤシ栽培の適地に向いていたからでもある。したがって今日でもその主要栽培地は変わっていない。

全島におけるヤシ栽培面積は1967年が最大（26,500ha）で、生産量も同様に最高（3200万個）を記録した。その後は面積、生産量ともに減少傾向を示し、80年末には約10,100ha（うち収穫面積約6,000ha）、生産量2,436万個にまで減少（1ha当り平均生産量約4,100個）した。主な理由として台風による被害、農民が住居建設の土地確保にヤシ林を伐採したなどをあげることができる。

本島における主な栽培品種は中国語名で次の3種である（いずれもTall type）。

1. 中園果 2. 黄椰子 3. 摘蒂仔

この3種のうち「摘蒂仔」の生産量が最も高い（年果房数60～100個）。なお、人為的な授粉作業は行われておらず、全てを自然のそれにまかしている。また「摘蒂仔」の果房重量は平均して雨期収穫のものが2.5 Kg、乾期収穫のものが1.5 Kgである。

「東郊人民公社」にみるヤシ栽培状況

同人民公社（人口3万4,000）は、文昌県東郊にあり、同島で最大のヤシ栽培を行っている（80年実績で同島全生産量の約5分の1を占める）。

81年末見込みでの植付け面積は約2,000 ha、植付け株数約50万（うち結実株数30万）で、80年には500万個の収穫をした。収穫量は同一品種でも海岸線に近いものの方が高いという。

同人民公社のもつ土地のうち、今後ヤシ栽培に向ける面積は約2,660 haで、85年までにその全部の植え付けを完了する予定。

苗木の育成期間は約1年で、高さ80 cmほどに達したところで本畑へ移している。株の植付け間隔は7×7 mで、0.0666 ha（1ムー）当りの平均植栽数は18株。収穫は植栽後6年目から。

現在、部分的に僅かながら有機肥料を与えているが、全体的には無肥料に近い状態である。この責任者（書記）の説明によれば、資金的に化学肥料が調達でき、その投入が可能になれば、ヤシ樹の生長を早めると同時に果房結実数も従来の倍近くまで増やせるという。

当人民公社には搾油工場がない。

コブラの乾燥は90%以上を機械で処理しており、自然乾燥はごく僅かである。収穫は生産量の高い6～7月に集中し、この時期だけで1年の70%を収穫する。1人当りの1日収穫能力は、高い木で70株（果房約700個＝手で収穫）、低い木で130株（鉄鉤を使って収穫）程度。

また、当人民公社の「建花山生産大隊」では、コブラ粉を生産している。ここでは最盛期の6～8月の期間に1日当りコブラ7,500～8,000個を処理し、1日約1 tの生産をあげている。

3. コ シ ョ ウ

同島におけるコシウ栽培の歴史は浅い。1951年に瓊（琼）海県の華僑が同県にある「塔洋人民公社」にマレーシア産の苗を初めて試植したときにはじまる。その後引き続きインドネシア、マレーシア、カンボジア等から種子を導入し、万寧県の「興隆華僑農場」、保亭県の「保亭育種場」で試験栽培が行われる一方、文昌県の龍樓人民公社「東升農場」では、60年代初めより7 ha弱に及ぶ作付けを展開してきている。

種類は大半がいわゆる黒コシウ。現在1 ha当りの平均生産高は33.3 Kg前後だが、自然条件、肥料投入などに恵まれたところでは、100～133 Kgの高い生産をあげている。

現在、生産繁殖は挿木で行われており、本畑移植後3～4年目で収穫ができる。

概して島の中南部で小規模に栽培されているが、これは主に温度、降雨量の関係に加え、防風対策上の問題があるからで、1,300～2,000 m²の植付け面積が多い。したがって、比較的風の静かな地形が選ばれ防風林、排水設備に注意が払われている。本畑に移植するときの穴の直径は80 cmで、深さは60 cm。穴間隔は普通2×2 m（1 ha-2,500本植え）だが、比較的肥えた土壌のところでは2×2.5 m（1 ha 2,000本植え）の間隔を採用している。春季と秋季の定植が多い。

次に管理面では、東南アジア主要生産国で行われている方法とほぼ同じである。

収穫期は5～7月で、7～10日間隔で5～6回収穫して終る。加工は水槽に果皮が腐敗するまで浸した後、水洗いをし、太陽光で乾燥する方法がとられている。

各地のコショウ栽培関係者の話しを総合すると、品質は東南アジア産に比べて劣ってはいない。80年時の全島における総栽培面積は3,300 ha（収穫可能面積1,000 ha）で、生産高は約800トン。この大部分をヨーロッパへ輸出しているもよう。

4. オイルパーム

1926年に華僑がマレー半島より苗を導入し、僑界と瓊山に試植したが、生産を上げるまでにはならず、本格的な取り組みをはじめたのは1955年以降である。

すなわち政府はオイルパームの経済作物としての高い価値を認め、タイ、マレーシア、アフリカから大量の種子を輸入し、国営農場および人民公社での積極的な栽培を奨励した。その中心は国営南賓農場と同海南農場で、1960年当初の両農場における栽培面積は約2.7～3.3 ha。一方、人民公社には政府が資金の貸し付け、苗木の提供、栽培指導をするなどの施策を講じた。海南島における栽培面積が最高を記録したのは60年代の後半で、総栽培面積は約2万haに達している。しかし、着果数が少なく、果実そのものも生育不良で、経済作物としての価値をもつまでにはならず、70年を境に年々縮小を余儀なくされ、80年には回復傾向にあるものの約1万3,000 haにとどまっている。

減少の主な原因として①不良野生種子の導入、②やせ地への植栽、③肥培管理の欠如、④防風対策の不備——等の問題をあげることができる。これらの失敗と試行錯誤の繰り返しは、1970年代中頃まで続く。

その後はマレーシアとの技術交流を活発化させる一方で、1975年に入って再びタイ、マレーシア、アフリカから優良種子を導入し、新植・改植が進められている。

今日、海南島のオイルパーム栽培地の中心は崖県の南賓農場とその周辺地域の人民公社であり、同農場

が栽培面でのリーダー的な役割を果たしている。

南賓農場 同農場における新植・改種は76年時0.8ha程度だったが、78年約40ha、80年約530haの植付けを終了。また82年には約670haにまで拡大させる方針（新植と改種の比率はほぼ半々）。

従来の品種は5品種といわれているが、その多くはdeliduraとE. G. Pisiferaである。現在進められている新植・改植はこれら2品種からE. G. Teneraに転換しようというもの。

同農場を中心とする栽培地域の土壌は、おしなべて沖積砂壤である。

育苗・植付け（1ha当り労働力225～270人）から収穫（同225～270人）までの期間は早いもので3年だが、大部分は4～5年。同地域における1ha当りの植付け本数は195株というのが普通で、一株当りの年平均生産量は成熟期をむかえたもので40～50Kg（76～77年の植付け収穫量）。

搾油工場は周辺に2件あるのみで、他には存在しない。また両工場合わせた1日当りの搾油能力が24トン程度なので、収穫時には果実量が工場処理能力を上まわってしまうのが実情である。したがって収穫から搾油まで平均3日（栽培面積の拡大にともなう今後の収量増に対処するため、将平、既存搾油工場の規模拡大あるいは新設をする計画がある）ほどを要するのが実情。2工場の稼働期間は3月～12月の半年間である。また生産された油は中國大陸に向けられ、その用途は大半が工業用で、食用はごく僅かにとどまっているという。

※ Deli dura

Teneraが出てくるまで東南アジアで栽培されていた品種で、1948年にボゴール植物園に植えられた系統である。Congo typeよりは殻は薄い、その果実に対する割合は約30%と大きい。豊産ではあるが優良種とはいえない。

果肉／果実 60%

殻の厚さ 2～5 mm

核／果実 8%

※ E.G.Pisifera

殻を完全に欠き、核は一般に非常に小さいか又は単に空腔を有するにすぎない。果房生産性低く、雌花序は開花しても数日後には早くも枯死してしまうものが多く、又そうでなくても授精後3～4カ月以内には枯死し、なかなか成熟にまでは達しない。結果するものがあったとしても、それは1果房中僅かな数である。

果肉／果実 95%

※ E.G.tenera (D×Pの1代雑種)

Dura と Pisifera の中間的な単因子雑種であり、現在のオイルパーム栽培の核をなす優良品種である。果房生産力高く、果肉は厚い。

果肉／果実	80%
殻の厚さ	1～2 mm
殻／果実	10%
核／果実	9～10%

工場における果房当りパームオイル収量率 12.5～22% (平均 20%)

(出所：オイルパームの栽培及び処理技術，昭和55年3月国際協力事業団)

5. カシューナッツ

海南島にカシューナッツが導入されたのは最近のことである。すなわち1957年に故周恩来総理がインドを訪れたおりにサンプルとして少量持ち帰った種子を試植したのが初めてと伝えられる。本格的な栽培は、翌58年にインドより大量の種子を輸入し、楽東、陵水、崖県、東方、昌江など各県の海岸に近い地域に播種されたのが始まり。その後、新たに播種されているカシューは、これらの盛樹から採取したもので、74年以降、飛躍的に栽培面積を拡大してきている。1980年末現在の同島における総栽培面積は13,000 haで、うち収穫可能面積は1,800 ha、総生産量は152トンである。

各地の栽培状況をみると、一般に3～4月(早春)に播種(平均1ha当り180～210本)している。また収穫可能な経済樹令に達するのは5～6年目。収穫時期は6月の1カ月間に集中している。

同島のカシュー生産量に関し、たとえば昌江県にある「海尾人民公社・白沙大隊」の20年樹は、1樹で年41.5 Kgの生産をあげたといわれる。また、陵水県の文羅人民公社では肥培管理に力を入れたため、植後3年目にして1樹より年生産0.5 Kgの収穫をみた——といったような報告もいくつかあるが、ここでは楽東県にあるカシュー生産農場の関係数字を海南島の平均的なモデルの一つとしてあげておく。

植付け総面積	1,670 ha
収穫可能面積	1,465 ha (74年植付け，樹高3～4 m)
盛樹収穫量／年 (74年植付け)	① 3.5～4 Kg
	② 10 Kg
	③ 15～20 Kg

肥料(年1回) リン酸 (1樹当り200g)

尿 素 (" 200g)

なお、海南島のカシューは全生産量の95%をヨーロッパ、香港、日本等へ輸出している。

※カシューを中国語で「腰果」(ヤオクオと発音)と書くのは、ナッツの形ちが腰の曲った人に似ているところからきている。

つまり種核がとび出して付着しているように見える特異な形態をした果実で、種核のようにみえる果中の仁は勾玉状。その炒ったものは味がミルクより濃厚で品質が優れるため、ナッツ(Nuts)の王者ともいわれる。

熱帯では食後にたべる殻果として一般化しているが、近年、欧米人の間でも用いられるようになり、日本へも輸入されてビールのつまみ、チョコレート菓子、洋菓子などに使用され、その消費も次第に多くなってきている。

現在インドは世界第1位の生産国で、その輸出も世界の首位を占めている。近年漿果の部分や殻の処理法、機械の改良、あるいは新しい用途の開発が進み、また、その他の熱帯地方でも経済的に有利な作物として、改めて重要視されるようになった。副産物としての殻油(Shell oil)も工業的な利用の面がひらけて主要生産国では欧米、日本などへ輸出している。

熱帯では果実の大きさ、仁(Nut)の品質、果托(Apple)の色や形、その他成熟の早晚や収量などにもとづく品種区分が認められるとされているが、いまだ明瞭な品種はない。栽培面では、土質に対する適応性が広く、降雨量500~4,000mmの範囲に適正する。熱帯では標高1,000mぐらいまでは生育するが300m以上では収量が思わしくない。

6. コーヒー

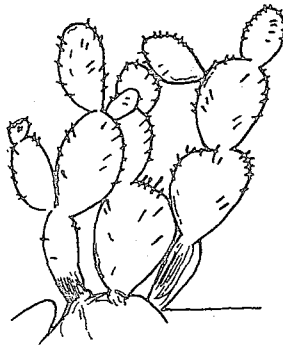
本島に初めてコーヒーが導入されたのは、1908年前後、石壁瓊安公司与僑興公司の手により種苗の購入が行われたといわれている。

その後、引続き華僑がリベリカ、ロブスター、アラビカの3種を導入し、文昌、澄邁、万寧、保亭、崖県等の地に植栽し、栽培面積が広がった。現在も同島における主な栽培品種はこれらの3種であるが、最も多く栽培されているのはロブスターである。1960年の全島栽培面積は約1,930haで、生産量は過去最高を記録した。以後、コーヒーの作付面積は年々拡大を続け、1967年の生産量は約192t、1980年の栽培面積は約380haで、豆生産量は約80t(うち人民公社の栽培面積は約100ha、同生産量約47t)を示した。

コーヒーの病害で特にサビ病による病害は世界のコーヒー生産地で、まゝ発生するが、同島では

このサビ病に強いロブスター種を中心に栽培しているので、これまでのところサビ病の発生はあまりないようだ。ただ当地の専門家によれば開花しても結実しないで落花してしまうものが多く、結実の歩どまりが悪いという説明があった。これは作付地の自然条件からみて、高温と過湿が障害になっているものとみられるので、これを避けようとするならばカバークロップを活用するか、山岳地帯に作付地を求めるなど、地域の選定が必要になるものと思われる。

また、同島のコーヒーの多くは香港に輸出されているもようだが、現在中国は国際コーヒー協定に加入していないので、国際商品としての格付けで低いところにとどめられている。したがって同島のコーヒーを発展させていくには、栽培、調整法等の問題に加え、全体生産量が増加した時点で、同協定に加入するなど、生産国としての認知をはかり、価格の安定、市場の確保をはかることも考慮していくべきであろう。



海南島の南部から南西部一帯には、ウチワサボテンが多く自生し、小規模ながら薬用栽培もしている。岩波国語辞典では、サボテンの「語源は未詳」とあるが、角川外来語辞典（荒川惣兵衛著）には「海南語 三脚釘 サボテン」と明記されている。現地では「サイナムチョウ」と発音していた。

海南島の主要作物及び水畜産の実績（1980年現在）

1. 熱帯作物

作物	栽培面積	収穫面積	生産高	
ゴム	213,000ha	93,000ha（採取中）	ゴム生産高	71,000t
コショウ	3,300ha	1,000ha	生産高	800t
コーヒー	380ha	127ha	豆生産高	360t
ココヤシ	10,100ha	6,000ha	生産高	2,400万個
オイルパーム	13,000ha	不明	〃	不明
カシューナッツ	13,000ha	1,800ha	〃	152t
サイザル	2,500ha	860ha	繊維生産高	785t
シトロネラ	10,700ha	8,000ha	油生産高	500t

2. 経済作物

サトウキビ	25,000ha		生産高	600,000t
落花生	39,000ha		〃	21,000t
ゴマ	13,000ha		〃	2,800t
茶	4,400ha	1,400ha	〃	1,630t
パイナップル	6,100ha	3,700ha	〃	4,000t
薬材	3,700ha			

3. 食糧（主にコメ）

595,000ha

生産高 1,230,000t

4. 水産漁獲高 41,000t

牛飼育 815,000頭

羊飼育 230,000頭

豚飼育 210,000頭

今後の農業開発と農業開発協力

1. 農業開発

海南島は81年の晩稲と主な熱帯作物の取入れをすでに終えたが、関係部門の統計によると果物を除く農業、林業、畜産業、副業、漁業の分野で飛躍的な発展がみられたという。

以下は、広州12月2日新華社発=中国通信が伝えるところの成果である。

「食糧は前年比12万t、民営の乾燥生ゴム同10%、サトウキビ同50%、コショウ同40%弱、コーヒー同30%強、とそれぞれ増収した。牛の飼育頭数は86万頭強に達し、史上最高を記録した前年より4万5,000頭増え、豚の飼育頭数も250万頭で過去の史上最高年より10%近く増えた。これら農業生産の発展は農村人民公社および国営農業企業の社員の経済にも好影響を与えている。同島で最も貧しかった東方県を例にとると、今年1人当りの平均収入は86元。前年比49%の増加である。また、各県では農家1戸当りの食糧生産量が5tもしくは収入が1万元を越える『先進』農家が現れはじめた。

80年7月に、国務院は海南島の建設方針を決定している。この方針は『ゴムなどの熱帯作物の栽培を加速させることに重点を置き、熱帯林木の植林を積極化し、食糧生産の増大に努め、農業、林業、畜産業、副業、漁業の各生産を全面的に発展させ、同島の特徴に合った新しい生態バランスと農業を徐々に確立する。そして国営農業企業と農村人民公社・生産大隊をともに裕福にする』ことを目標にしたものである。海南行政区党委と各県党委は、この目標を実現するため、同島の優位性を基盤にする一方、地元の実情に合った農業生産の配置調整につとめ、生産構造をより合理的なものにした。具体的には全区で収量の低い2万haの水田をサトウキビや他の工芸作物などに作付け転換し、林野に適した傾斜地で大々的に造林を行い、ゴムの木を植え、コショウ、パイナップルなどの栽培を推進したこと、などである。今年、新たに栽培した9種の熱帯作物（ゴム、コショウ、ココヤシ、ハハコグサ（キク科の薬草）、コーヒー、パイナップル、茶、カンヌナッツ、サイザル）の総作付け面積は2万2,300ha強で、うち、ゴムの作付面積は史上最高の8,730ha強。ココヤシは前年比1,600ha増の2,600ha強、パイナップルは同1,300ha増の7,330ha。コショウの作付面積も4,000haで、史上最高を記録。全島の造林面積は2万haにのぼり、前年のほぼ2倍に拡大した。

現在、同島各地の一部人民公社、生産大隊はゴム、パイナップル、コショウ、サトウキビを主と

する生産基地を初歩的に形成、あるいは形成しつつある。文昌県はすでにココヤシ、コンショウ、パインアップル、落花生の主産地としての地位を築き、ココヤシ生産量では全行政区の半数以上を占めるまでに発展してきている」。

伝えられるように国务院の政策決定を受けて、広東省政府、および海南行政区が経済性の高い熱帯作物栽培に力を入れはじめたことが、熱帯作物の栽培熱を高めている原動力になっていよう。

しかし、全島をまわった印象では、作目転換、あるいは作付け面積の拡大はあったとしても、その作物のグレードにおいて必ずしも伝えられるような発展があったかは、やや疑わしい。農業の基本は、改めて述べるまでもなく“適地適作”であり、もし、これを人為的に修正するには各作物の遺伝的な特徴をつかみ、育種という科学的な手法で解決する以外にない。この点での基礎的な研究が十分にされ、かつ克服されたという作物別の具体的成果について、当地で会った研究者等から示されることはなかった。

海南島において過去栽培に成功している作物の種類をみると、温帯または亜熱帯のもの（コメ、サトウキビ、サツマイモなど）が主で、純熱帯性のもの（ゴム、ココヤシ、オイルパームなど）は、生育不良を示していた。これは環境要素にそった作物の選定に問題があることを示唆していよう。同島は冬3カ月の気温が亜熱帯性の域を出ず、加えて夏期の雨期が以外に長いという特徴が熱帯性作物の生育を阻害しているといっても過言ではない。

また灌漑・排水施設の未整備、防風林による防風対策の不完全さもあり、これらが比較的整っているところでも、肥料不足は恒常的で作物の生育を大きく妨げている。海南島の土壌はおしなべて瘠薄である。養分を土壌にいかにつ供給するか、また収量増加に伴う養分欠乏をいかに補うかも同島農業の価値を決定する主要因であることを忘れてはならない。多量の有機質肥料と栽培試験に基づいた適切な窒素、リン酸、加里を含む化学肥料の施用及び石灰による酸性矯正が必要なことは、同島の専門家も例外なく認めていた。

2. 農業開発協力

海南島に対する農業開発協力は、最近広東省が対外開放をもって開発を促進する政策を決定したことで、海外及びわが国の民間にも大きな関心が生れてきている。同島が農業開発を推進するうえで当面期待している外的要因は、外国の民間企業等の進出による資金、技術の確保である。

広東省政府は言う。「海南島は国家の統一的な対外政策と広東省の統一的な指導に従って、大胆に外国資本、華僑資本を吸収し、対外貿易を拡大し、観光事業を発展させると同時に、銀行預金の

利率引き上げと建設債の発行という方法をとって、社会の遊休資金を調達して建設に使う。開放の重点は外資と技術の利用であり、これにより同島の熱帯作物の栽培業、熱帯林業、養殖業、熱帯作物の製品加工業、熱帯森林工業、観光業の開発、及びエネルギー、交通、通信の改善などの基礎建設、鉱物資源の総合開発等を進める」。

そのために広東省政府は次のような規定をしている。

「外国投資家が海南島に投資して設立した企業の所得税は深圳、珠海経済特別区の方法を参照しながら、特惠待遇を与える。共同生産、共同経営企業での中国側の出資割合、及び土地使用料、労働者の賃金は深圳、珠海より低くする。外国投資家が合併企業で得た利潤は、中国政府と広東省の関連規定に従い、中国銀行を通じて自由に送金できる。関税の面でも特惠政策の実施を提案する。外国投資家との共同生産、共同経営企業に働く従業員については、一律に契約制を実行する。企業は関連規定に従って、自ら従業員を募集、試用、解雇する権利を有する。投資の方式は、委託加工、ノックダウン、補償貿易、共同経営、共同生産などの各種の方式を運用してよい。海外のメーカーが海南島で協力しながら、総合的な開発を行うのを特に奨励する。

広東省は外国投資家の海南島での投資、開発を容易にするため、経済協力項目の審査、承認の権限、出入国の審査、承認の手続きで緩和の規定を設け、海南島行政署と海南島一族・ミャオ族自治州は、これらの面でより多くの自主権を得る。（広州12月2日発新華社＝中国通信）」。

この規定から海南島開発のテコとして外国資本及び技術の導入を積極的に進めていこうとする中国側の基本戦略がわかる。しかし、大看板である“熱帯作物基地”を実現するための外国資本、技術の受け入れという観点からみると、いまひとつ規定は明確でない。深圳、珠海の経済特別区を下敷きにしているといっても、こちらは軽工業団地であり、農業進出は加工以外に見るべきものがないのである。従来同様、農業、特に栽培面での外国資本の進出を認めない方針なのか、あるいはそこまでのツメが行われていないのであろうか？ 海南島の特産品は、中国経済全体の物資生産計画の中に組み込まれており、対外貿易は国家計画との調整の上に成り立っている。砂糖、ゴム、茶、塩は、それぞれ国家あるいは広東省の物資配分計画の枠組みの中にあり、島が独自に処分できるのは、計画超過達成分だけに限られるという実情、また、社会主義の制度からして、外国資本に営農のための広大な土地を提供するという理由付けをすることも苦しいところである。

これらの点は今後、中央、広東省、海南島の三者で十分な調整協議が行われなければならぬ部分であろう。

農業は他産業とは本質的に違うので、海南島といえども社会主義体制の中に組み込まれている以上、外国資本の受け入れ、合併事業のたぐいは不可能だとする意見が多い。原則として私もそう思う。しかし、この悲観的な見方については次の事業を取り上げて、民間による農業開発協力の制度

上の可能性を測る1つの目安としたい。

今年7月、海南島の華僑農墾局は、シンガポールの南海発展公司と向こう25年間にわたる合併協定に調印した。

これは澄邁県にオイルパームを栽培し、搾油工場を建設して、栽培から搾油までの一貫体制を敷くというもの。規模は収穫開始後、1ha当り60tの生産が目標で、年間搾油能力48万t、同油生産量12万tを目標にしている。

両者の守備範囲は

華僑農墾局が土地と労働者を提供する。一方、南海発展公司は、向こう25年間に5,000万米ドルを投資し、種子、技術、生産設備を提供するとともに農場長に農業専門家を派遣する。また生産されたパーム油は内需と輸出にふり分ける。

おわりにあたって、将来わが国の民間が、海南島で農業開発協力事業の展開を考える場合の留意すべき問題につき、2つの点を指適するとともにチェックポイントを記しておこう。

その第1は、ネライとする熱帯作物基地＝換金性、という考えが、海南島側、とりわけ島民の所得水準の向上にストレートに反映するののかという点である。同島は主食をまだ自給できないし、日用工業品についても同じことがいえる。中国国内の地域間分業という考えかたからすれば、これは当然である。海南島の農業開発については、これまでずっと国家資金が投入されてきた。同島から広東省、中央への利潤上納とをバランスにかければ、間違いなく投入が上納を上まわろう。しかし、利潤上納がゼロでも、投入物価格が高く設定され、逆に農産物価格を低いところにとどめれば国家に寄与していることになる。両者のこのような関係を理解するならば、公正な評価基準として価格設定をするといっても、その根拠が定かにならない。常識的にいえば計画経済の基本的戦略となる中央の価格政策によって決まるわけだが、現在のところ海南島の自主活動権の範囲がこの中に入るのか、別枠であつかわれるのかが、はっきりしていないように思われる。

また、マレーシアのオイルパーム、フィリピンのココナッツ、タイのメイズなどにみられるように東南アジア諸国の農産物はおおむね国際市場価格で生産性の向上につとめ所得増加を図るといった国際貿易指向できたのに対し、海南島の場合は国内市場指向が強いといった立場の異りがある。つまり、生産コストが高く販売価格が高ければ、これを投入する政府は力が弱まり、外国から農産物を輸入せざるをえなくなる、逆に生産性が上昇しても販売価格が抑制されれば海南島民の所得は上がらなくなる。農業協力はその土地の人々の働く意欲と協力がなければ成功はむずかしい。外見上の利潤成果だけに目を奪われることなく、価格政策とのからみの中で栽培作物を選定し、同様の意味から加工の対象分野も考えていく必要があるように思われる。

第2は、戦前における日本占領時代（昭和14年～同20年）の農業知識をそのままあてはめぬことである。戦前、わが国が同島を占領していたおりには、専門家による農業調査もいく度となく行われ、農業会社の進出も数多くみられた。当時の資料の中には、今日でも価値を失っていないものを多く認めるが、企業農業についていえば、成功していたといわれるものでも、疑問符がつく。この点での認識を特に強調しておきたい。つまり、当時の国策にそった植民地的な支配下のもとでの進出企業は、経済性を徹底的に追求しなくてもよく、国際商品としての競争力を強いられずに済んだという特殊性があったのである。

農業は自然が相手だけに投資リスクが大きく、懐妊期間も長い。空想的に資源を過大見積りしたり、机上だけで開発計画をたてることが、どのような結果を招くか、過去のいくつもの失敗例を引き出すまでもないだろう。

わが国の民間が将来、海南島の農業開発に協力しようとする意図と機会があるならば、自然条件はもとより、政治体制の違い、さらには社会・経済条件を十分に掌握、考慮し、資金と科学的知識の許す範囲で行うようにしたいものだ。そうすれば、たとえそれが地味な事業であっても、海南島の農業開発に大きな貢献をするであろうし、事業の成功にもつながろう。

チェックポイント

1). 農業開発投資の目的の明確化と必要投資額の概算

- a. 投資対象として利潤を得る
- b. 地域の農業振興を図る
- c. 農作物の供給源を多角化する

農産物の供給源を多角化する一環として農業開発投資を行なうのであれば、それが経営戦略上、メリットのあること、長期資金の投資が経営戦略の上で引き合うものでなければならぬ。

- イ. 対象農作物の生産計画（予測）に基づく確保必要な生産量
- ロ. 対象農作物の将来見通し、または供給源の安定性の評価
- ハ. 農業開発投資により確保する農作物生産量の決定

ニ. 農業開発投資

- (A) 農業開発投資により確保する農作物
- (B) 平均 ha 当り予想収量
- (C) 農業開発規模 (A/B)

(D) ha 当り農業開発費及び管理維持費

(E) 農業開発費及び管理維持費 ($C \times D$)

ホ. 波及効果促進のための活動とその費用

2). 農業開発投資可能資金量の明示

イ. 投資は日本側で、海南島側は土地と労働者の提供といったジョイント方式を前提とし、さらに未墾地の基盤整備から行なうとなれば、長期プロジェクトとなる。

従って収穫開始も数年を必要とし、投資金の回収開始は単年性、永年性作物の植栽によって異なるものの即回収はできない。

ロ. 資金量に応じた最適農業開発プロジェクトを立案し、実施することが農業技術のテーマとなる。

2. 海南島対象地域の事前調査

農業開発投資の目的の明確化、資金調達の見通しがついた時点で農業開発対象地域について、次の詳細調査を行なうことが重要である。

- 1). 農作物の輸出上の問題点（輸出規制、税制、等）
- 2). 国情及び政治体制の安定性
- 3). 外資導入政策及び事業にかかる税制度
- 4). 土地制度及び社会制度
- 5). 農業政策及び農業基盤
- 6). 労働力の質及び量。労働政策及び労働事情
- 7). 農業関連産業を含む農業基盤の実態
- 8). 農業関係試験研究機関の実態
- 9). 農作物栽培技術及び既存農園の実態
- 10). 栽培・集買・加工、港までの出荷にかかるインフラ事情
- 11). 港の規模、回船事情、需要地までの運賃等の事情
- 12). 事業に用する資機材調達事情

3. 先行投資としてのパイロット農園

農業開発投資の目的、資金、地域及び相手の責任機関（者）が明確となった時点でパイロット農園を先行投資として実施することが、大規模で長期的プロジェクトには欠かせない。

1). パイロット農園の目的

- a. 中堅農園管理責任者の能力確認
- b. 現場での農作物栽培及び農園管理上の諸問題の摘出
- c. 新規導入技術の各種試験
- d. 現地技能、技術者の能力確認
- e. 現場における経営管理システムの検討

2). パイロット農園の規模

パイロット農園としては、既存農園で一応の経営単位となり得る規模が望ましい。仮りに 100ha を開発規模とすれば、基本的にはその $1/10$ または $1/20$ が望ましい。

4. 農業開発方式の検討

開発のスピードをどうするか（集中開発か漸次開発）、農業開発計画の検討にあたって、農業開発のスピードをどうするかも重要なポイントとなる。

- a. 資金的には集中開発が収穫開始を早め、短期間で収穫生産軌道に乗せるので資金回転を早くする。
- b. 経営労務管理面（中国側が分担したとしても）では、漸次開発が徐々に経験をふまえて実施でき、かつ作物配分の適材適所を可能にする。
- c. 機械化は漸次開発が効果的である。
- d. 農作物の生産はその緊急性にもよるが、漸次開発が高い確実性をもつ。
- e. 投資の安全度は、資金を長期に固定するが、漸次開発が高くなる。

心のふるさと海南島は今……

(「黒潮会海南島訪問考察団」日記)

黒潮会代表世話人 酒 井 具 之

広州の白雲空港を離陸した機が高度をとりながら珠江上流に向って西進する。いくつかの集落、いくつかの山脈を越え比較的大きな都市（梧州市）の上空から左旋回し南下しはじめると、眼下に大きな湖が見える。鶴地水庫（ダム）だろう。水路に恵まれたデルタ地帯・湛江市を過ぎる頃は、白雲空港を発ってちょうど1時間、雷州湾から雷州半島にさしかかる。徐聞から海安をすぎれば、そこはもう瓊州海峡である。同乗の兵士らが荷物整備にかかる。5分後、島かげが見え機は順次降していく。「あっ秀英港が見えるぞ！」の声と共に、脚が出て着陸態勢に入り、滑るように着陸した。位置からすると、昔の七基地そのままのようだが立派なターミナルビルが窓から見える。タラップがつけられ、兵士たちに続き夢にまで見た海南島に第一歩を印す。時まさに17時25分、感激の一瞬である。



黎族(左)と苗族(右)の娘さん — 崖県 —

空港特別室で中国側接伴員，外事弁公室のかたがたが歓迎の挨拶，当方もお世話になりますと簡単な答礼をし，お茶を馳走になる。その間，「遠来の友人をもてなす夕食に海南島第1級の料理，狗（犬）肉鍋を用意したいがどうか？」との問い合せがあった。当方としては「私は以前滞在中に，何回かご馳走になっているので，ご好意に甘えるにやぶさかでないが，他の団員はどうか判らないので相談する」と返答したところ，「団長先生の意向を聞いているので，団員皆さんの意見を聞いているのではない。右する

か左するかは団長が決めればよい」とのこと。「いや、こういうのが日本式の民主主義なのだ」と言っても「判らない。団長が決めたことに団員は従うべきである。嫌なら食べなければよい」と言う。そこで衆議一決して犬鍋をご馳走になることにしたが、到着早々体制の異なるのを痛感し、前途多難なるを覚える。「先ほど、秀英港を眼下にみて懐かしかった」と話したところ「秀英港は現在海口港と呼称し……」地名その他だいぶ変っていることを示唆される。しばらく休んだ後、本島で1台しかないという大型バスに乗り、宿舎に向う。空港より直進し、旧秀英道路に出る。旧市内に入らず大英山付近より右折し、旧瓊山街道を行く。夕方の自由市場は大変な人混みである。道の両側は、樹令20年以上の椰子が整然と並び、かつての海口の面影は一つもない。薄暮の道を走り抜け空港を出て約10分、公路の左側に“中華人民共和国海南行政区公署”“海南行政区革命委員会”と大書した石門が立っている。バスは、その中にドンドン入って行く。革命委員会・公署のそばを抜けるともう一つ門があり、その先が“海口招待所”である。椰子林に囲まれた外国賓客・高級官僚の宿舎、白亜3階建の立派なものである。玄関で小柄な要人が、にこやかに出迎えてくれる。今回の訪問に伴う中国側の最高責任者 外事弁公室主任 黄子桂先生である。早速会議室に招かれ、黄主任より歓迎の言葉と海南島の現況説明をうかがった。「我々は解放後、自力更生で生産に励んでいるが、何分にも全ての面でお欠けている。日本の皆さんからのご指導と協力をお願いしたい。現状をよく見て忌憚のないご意見を賜りたい」「私どもはお互いに、過去をふり返らずに前だけを見て進みたい。皆さんを迎えるのに、初めての経験なので何かと不行き届きの点もあると思うが、希望をどんどん出して欲しい。できる限りのお世話をさせていただく」と力強く語る黄主任の情熱に圧倒されると共に、その謙虚さに敬服した。これを受けて「いま私たちは、私たちの心のふる里に帰ってまいりました。今回の訪問に、ご理解をいただき、お力尽くし下さった要路皆さまに、深甚なる謝意を表します。1942年から45年にかけて、私たちはこの地で、将来海南島のために役立つ人間になって欲しいとの願いから、子供たちと一緒に勉強もし、情熱を燃やしてきました。今は立派になられているでしょうその子どもたちを想い、海南島の人情、風物を想う気持ちの現れが黒潮会となって、毎年8月に暑い海南島を思い出しながら、全国から同志が集い、既に28回の会合を重ねております。その海南島の土を踏むことができ、夢ではないかと感激しております。お互いに不幸な時期がありましたが、今回の訪問を機に、かつての友情を呼び起こし、日中友好の輪を拡げる一助になれば、これに過ぎる幸せはありません。私たちはまだまだ現役で、若い人たちに負けない気概をもって頑張っております。故郷の繁栄を希求しない者がおりましょくか。私たちの第二のふる里海南島の発展を心から希望すると共に、日本にいて 南島発展のためにできる限りのお手伝いをさせていただくつもりであります……」と私は訪問団を代表して応礼のあいさつをした。

夕方、宿舎の200m先の食堂に向う。食堂は8時までとのことだが、遠来の客をもてなすた

め9時まで1時間の延長をしてくれた。テーブルについて、ビールで乾盃の後は、いよいよ名物犬肉ナベのはじまりである。コンロの上に独特な土鍋が湯気を立てている。犬肉は臭いが強いのでチシャ・白菜の外に芹・韭のような香りの強い野菜がついている。脂肪分が少ないので時々ラードを入れ補給する。ブクブクと泡が立ちはじめれば、もう食べられる。スタッフがアクをとってくれる。なんやかやと言いながら、おそろおそろ口に運ぶ友もいる。「オイッ、俺の肉には毛が残っているぞ!」「案外うまいじゃないか!」口に入れた犬肉をビールで流し込む者がいるかと思えば、野菜ばかり探して口に運ぶ要領のよい者もいる。団員のSさんだけは食べる様子がない。「私しゃ犬肉はどうも……」と逃げの一手である。「せっかくの好意でもあるし、郷に入っては郷に従え、話の種に一片だけでも……」とすすめ上手がいて、さすがのSさんも「じゃ一片だけ、野菜も入れて下さ

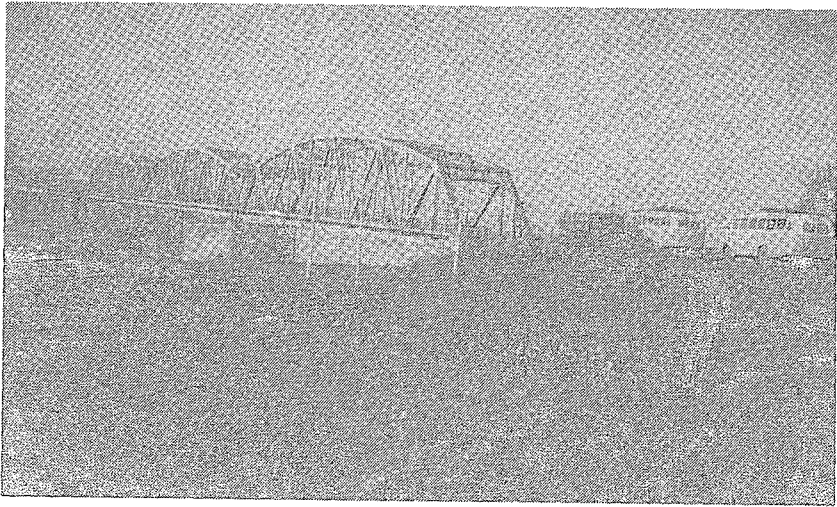


賑わう自由市場 — 瓊海（嘉積） —

いよ」、清水の舞台から飛びおりる心境で口に運ぶといったありさま。私がよそのテーブルに酌をして自席に戻ると、何のことはない、Sさんは立上って自分で杓子を動かしている「そうなんです、案外いけるんですよ、犬肉ナベは。名物に、うまいものあり、犬肉ナベ!」こうして第一夜は更けたのである。

「1月13日」（晴） 海口 ～ 興隆

翌日は36年ぶりの感激と興奮とで眠れぬ一夜を過した一行を迎えるにふさわしい快晴の朝だった。招待所のベランダより、椰子の葉越しに見る朝焼けは素晴らしい。三々五々庭内の小径を食堂に向う足どりも軽やかである。入口で、中国側接伴員たちがにこやかに迎えてくれる。食事の時間もどかしく、宿舎に戻る道すがら、椰子やハイビスカスをバックに写真を撮る姿があちらこちらに……。8時集合。バスは前日より離島するまで、黒潮会の専用となっている。運転台には、名は知らねど可憐な花が飾られている。案内役の中国側関係者らと共に乗車、瓊海（嘉積）に向け出発。



南渡江鉄橋 — 瓊山 —

バスは、革命委員会を出て左折し、見事な椰子並木が整然と続き、通勤ラッシュで混雑する旧瓊山街道を進む。五公祠を左に、瓊山府城への道を右に見て南下する私たちの眼前に、一条の水帯が入ってきた。海南島の母なる川“南渡江”である。往時のこの辺は、土饅頭の墓地と水牛の放牧、カアレンの群ばかりだったのに、それらは一つも見当らず整然とした農耕地が続いている。戦時体制のため、銃を保持した歩哨の立つ南渡江鉄橋を渡り、雲山から二股に分れ、左→文昌との標識をみながら右側の道を南下する。かつて環海公路の重要地点であった文昌を経由せずに、バイパスが出来て直接に嘉積に出られるようになったとのこと。東回公路（海口—瓊海—陵水—三亜間）は、片道二車線、内一車線分は簡易舗装され、昔の洗濯板道路とはだいぶ異り、腰の痛くなる心配は全くない。ところどころホウキを手にした小集団が、道路清掃に余念なく、清潔を保持している。

雲龍・紅旗（龍登）・三門坡・蓬萊……と各集落を抜ける平坦な道に、時に山なみを見ながら10時35分瓊海（嘉積）に入る。約2時間20分、125Kmの行程であった。

私たちの記憶にある“瓊海市”に入ったというのに、何か一つピンとこない。瓊海県人民委員会の招待所に到着してから、戦後すぐの猛台風によって、市内の大半が被害をうけ、現在は都市計画によって新村（新市街）になっていることを聞いてようやく納得。バスで5、6分離れたところに旧市街が残っていたが、ここも新村旋風が吹いていた。狭い道を拡張するため、停仔脚のある町並の片側はそのまま、片側を壊して新しい建物にするといった具合で、懐しさも半減、不均合いの観はいなめない。

日ごろ見たこともない大型バスに乗っているのは、一体どんな野郎かと……黒山の人だかりである。手をあげて“チャ・モイ・ボー”とやると白い歯を出してニヤッとする。“オイ、あいつらは何者だろう。海南語をしゃべるぞ!”といった様子。“チャーラ・チャーラ”と返事をするが遠巻きに

して近づいてこない。案内役が“日本から中日友好のために来られた黒潮会の皆さんだ。30数年前に海南島にいた我々の友人だ”と説明している。街の中ほどにある自由市場は、群衆で溢れ、大へんな盛況である。屋根のあるのが国営商店で、露天の店は自営とみてよいようだ。自留地で収穫された農作物、その他勤労を終えてからの自由時間に工作したものは、自由市場で売買することができ、賃金外の貴重な収入となるため、自然に活気がでるのであろう。客を呼び込むけたたましい声が響く。道端に竹竿を吊しカラフルな色のシャツ・ズボンをぶら下げた店の隣に、米を山盛りにした籠、生魚・干物をならべた店、水々しい大根・芹・白菜を山積みした野菜売りに続いて、農作物の種子屋さん、懐しい菅笠・市女笠から籠類に混って、甘薯・ビンロー・タバコのバラ売り……ネズミ・モグラまで並んでいる。

瓊海の街をはざると、すぐ万泉川の鉄橋にさしかかる。ここも南渡江同様に歩哨が警戒にあっている。万泉川は肥沃な嘉積平野を構成する母なる川だ。堰堤をつくり灌漑に利用、また、5～6艘の竹筏に乗った漁民が、上手に操って鵜飼をやっており、川岸には、島有数の製糖工場が稼動していた。嘉積付近は昔から華僑の出身地として名高く、海南島の富裕地として知られているところでもある。万泉川に別れを告げたバスは南下を続け、“中原”から“楽会”をのぞみ、“龍滾”などを経て“万寧”へと進む。なんの変哲もない、ありふれた風景だが、私たち団員には、積年の夢実現、勿体なくて居眠りなどしてられないのだ。万寧から長安・東和（牛漏）を抜け、万寧江（太陽溪）上流にある興隆に入る。東回公路から右折し、整備された水田地帯、整然と植林されたゴム林を抜けたところに華南熱帯作物研究院・興隆試験場がある。瓊海より約2時間、行程は107 Km。濛々たる砂塵をまきあげ、まともに目もあけていられなかった凸凹で有名な悪路も、今は簡易舗装され、いたる所に灌漑用溜池や水路が設けられ、農業に対する行政当局の熱意がうかがえる。ここは那大農業大学興隆試験場をも兼ねているようで、1957年に創設された。事務室で島内の農業事情などの説明をうかがった後、15分ほどの距離にある“興隆華僑国営農場招待所”へと向う。太陽溪を利用した灌漑用水路を渡り、ゴム林を抜けた所に招待所がある。ここには温泉の湧出もあり、宿舎は近代的で快適であった。文革の最中「4人組に代表される急進派は、コーヒー・ココアは、ブルジョアの飲み物だから、木は切り倒せと指令してきた。一時は混乱したが、農民の良識が勝り、一本も切らずな今日にきている」といった誇らしげな話もきいた。

「1月14日」（晴） 興隆～三亜

いくら海南島とはいえ1月半ばの夜明けは冷える。中庭前の用水池越しに拝む日の出は、椰子林の間から壮厳そのもの、思わず手を合わせる。朝食はお粥とパンの併用。

朝露のたちこめる道は、時間が早いせいか人影もまばらである。見事に成育したゴム林の中でゴム栽培についての説明を聞いた。この華僑農場は、1952年に設立され、人口は約2万6千人。

ゴム・コーヒー・ココア・コンショウを主産品としている。かつては国家関係の悪かったマレーシア・インドネシアからの帰郷華僑が中心だったが、最近はやはりベトナム華僑が多いという。事実この章主任自身インドネシアからの帰国者だという。ベテテン女子採液員の見事な刃さばきによるゴム樹脂採集の実演、ココア栽培林も見学することができた。

この日の道を逆行、太陽溪を渡り東回公路に出て、バスは陵水に向け一路南進する。西崗団と五条砦との山間を縫い“南僑”を過ぎると往時、常に襲撃に備えた難所“赤坂峠”にさしかかる。台拓バスが喘ぎ喘ぎ往き来していた峠も、道幅が広く勾配もゆるやかになっており一気に通過。陵水平野の眺望が開き、五文溪にかかる橋を渡れば、陵水は近い。陵水溪のゆるやかな流れを渡って、新村計画のすすむ陵水の街に入る。興隆華僑農場から約4.2Km、1時間の行程である。公路ぞいにバスを止め、市内見学をしたが、古い家並みは一つも見えない。すっかり変貌しているのに驚ろく。自由市場は、賑わっているものの、水牛の背に乗った子供がノタリノタリしているのを見ても判る通り、瓊海に比べると規模も、物資もずっとスケールが段違いである。勿論、町そのものが小さいのだから、当然といえば当然かも知れない。藤橋へ向けての平坦なモクマオウ並木の公路は、快適だ。左手に遠く連なる見事な椰子林は“新村港”の遠景である。長城・軍田を経て、英州を通過したあたりに解放軍の高射砲陣地が並ぶ、足許の側溝にはパイプラインが延々と続いている。むかし見馴れた白石嶺の奇容を右手に見、左の海岸線に美しい椰子林が連なるところが“藤橋”。この町にも新しい家が建ち並び新村旋風が起きていた。旧い街はどうしたと尋ねたところ、この裏側にあるという。藤橋を出て、しばらくしてさしかかる峠が逐鹿峠で、往時はさきの赤坂峠に対して千早峠と呼んでいた。峠を越えると、三叉路にさしかかる。ここは直進すれば三亜へ、右折～田独、左折～紅沙から榆林へと向かう交通の要衝。往時は、軍用車・石原産業・三井農林・台拓などの乗用車及びバス・トラックがひんばんに走っていたところである。私たちは左折し、“紅沙小学校”へと向う。田独から榆林港へ鉄鉱石を満載した貨車を想起しながら、紅花溪に沿って南進、榆林内港が見えるころ、学校正門に到着する。この地は同行のMさんが校長として活躍された所。

昭和16年、榆林に日本人町を建設するために在住島民を強制移住させて出来た町が紅沙である。ニッパハウスを中心とした新しい町のたたずまいは、40年の歳月を経て今立派な町に変貌していた。

車窓から流れ込む潮風を頬にうけながら、榆林港を過ぎ三亜に入る手前を左折、山道に入ると、もうそこは鹿回頭。陵水から約80Km、2時間半の行程（鹿回頭は、三亜・榆林港を見おろす要衝で、占領時代は信号所を置いていた）。

ここの招待所は、海口・瓊海・興隆各招待所に比べ、その規模が広大瀟洒に整備されており、南フランスのリゾート地で、大富豪の別荘に招待されているような錯覚に陥る。かの江青女史が厳寒

の北京を離れ、毎冬この地で過すために、特命でつくらせたといわれるいわくつきの招待所で、来島のおりは専門の調理士、美容師、写真師まで連れてきていたそうだ。所詮、共産主義とは、文化大革命とは……余計なことまで考えてしまう。

食後休む時間ももどかしくバスに乗り込む。パンツ、バスタオルの入った大きな包を抱えた女子服従員も同行。いくら暑い南の島とはいえ、まさか1月に泳ぐとは思わなかった。10分後、歩哨の立つ瀟洒な建物につく。大東海海水浴場付属休憩所である。日本でも多くの海水浴場を知っているが、これほど立派な休憩所は、はじめてである。中国の国会議員以上の地位にある人たちの専用だという話。湾曲した浜は、白砂青椰子、水は澄み、沖にはジャンクが浮ぶ。波静かな浜の左右遙かに塀がしつらえてあるのは、専用海浜の境界だそうで、返還前の沖縄ホワイトビーチをフッと思い出す。やはり特権階級は生きているのか……。海底の小石・貝殻まで見える奇麗な海を堪能し、心地よい気怠るさをシャワーで流した身体に、熱いウーロン茶がしみとおる。清々しい気持ちで一歩外に出ると、椰子林の中で女性兵士の一隊が厳しい射撃訓練をしていた。一瞬の間に現実を引き戻される。しかし、この海岸は観光資源に乏しい海南島にとって、大きな目玉になるであろうことは確信できる。

大東海から岬を越えると、崖県。昔の三亜である。軍艦が停泊していた三亜湾に、懐かしい東洲島・西洲島が浮んでいる。塩田の続く風景から檳榔溪にかかる橋を渡れば、そこは、つわものどもの夢のあと、海南警備府・16警司令部・特務部三亜支部のあった南部中枢部である。司令部跡は崖県革命委員会となっている。中州にかかるもう一方の橋のたもとには、いく艘も漁船が船がかりしていた。往時はこの程度の船で、西沙群島・中沙群島あたりまで出漁していたものだが、ベトナムとの領有権争いが未解決の現在、どの辺りで漁をするのだろう……。朝昼晩と鯛にうなされたところが懐かしい。市街地に入り右折すると、モクマオウ並木のメインストリートが続く。道幅は以前に比べると大きく拡張されている。建物はすっかり建て替えられ、昔の面影は一つもない。場所がら珊瑚礁の砂が混っているのか道は白い。バスがとまるとワッと人が集ってきた。黎族・苗族それに回族・蛋民もいる。三亜銀座の四ツ角にある崖県工芸局に立寄り、海松パイプなどを土産に買ったが、訪れる旅行者が少ないうせいか目ぼしい物は何もない。時間がないので港までは行けなかったが、さすが港町のことで路傍でマグロ・シイラ・小魚類に混って珊瑚・漁網などが売られている。おなじみの長い水キセルで煙草を吸っている老人の姿は昔のまま。午後7時30分バスに送られ、鹿回頭黎族生産大隊椰莊農場集会場に着く。真暗闇の中で集会場だけが煌々とし、遠来の客を迎える地元の人々が黒山のように集っていた(昔から黎族・苗族の部落では娯楽がなく、結婚式・葬式・来客があると村中総出でもてなす風習がある)。バスをおり会場に着席するまで、心温まる拍手が続く。まず、人民公社の主任より歓迎の挨拶、つづいて黎族衣装をまとった娘さんから、団員一人

一人に大きな椰子の実を贈られた。答礼に立った団長の私は、かつて黎人対策を担当し、その習慣を知っているので大きな実を手にて会場中央に出て、四方の参集者に目礼を送り、はじめは静かに、終り脱兎の如く一気に飲みほした。実を逆さにして一滴も残っていないことを証明すると、期せずして大きな拍手が湧く（黎族は訪問者を遇するのに、先ず椰子の実を差し出す。途中で下におろすと丸い実は倒れ、折角の果汁がこぼれてしまうので、一気に飲みほすのが礼儀とされている）。黎族独得の節回しの歌、収穫の踊り、棧織りの踊りなどが披露された。「私たちの拙い歌や踊りで、長旅の日本の友人のお疲れを幾分でも癒すことができれば、こんな嬉しいことはありません」の言葉にも心が和む。



民族学院の女子学生たち — 通什 —

「1月15日」（晴時々曇） 三亜 ～ 通什

昭和19年以来37年ぶりに、同じ三亜の空の下で目が覚める。朝食には昔馴染みの油条があった。関係者多数に見送られて招待所を出発。旧司令部・特務部前を通り、三亜から一路西進。

三亜湾沿いの穏やかな海岸の、一角に巨岩奇岩がごろごろしている一種異様な風景がある。三亜から約30Km。この他は宋の宰相“蘇東坡”が王安石の新法に反対して、時の皇帝に直諫、逆鱗にふれて流された場所という。多感な詩人宰相“蘇東坡”が、はるかに都をしたい、当時は天の果てかとも思われる僻地に涙して“天涯海角”と名づけたと伝えられ、“天涯孤獨”という言葉も、ここに由来するといわれている。大きな岩石の林立するこの一角に立てば、感のにぶい私にも、今昔の変化に無量の思いがする。人間は時として絶望的な孤独感に襲われることもあるが、蘇東坡がこの浜辺で感じた孤独感・絶望感に比べれば、物の数ではあるまい。巨岩に蘇東坡が書いたといわれる“天涯”という字が彫られてあった。トカゲの巣穴が点々とする海岸から、汗を拭き拭きバスに戻ると、そこは“馬嶺”である。馬嶺駅にちょうど三亜行の列車がとまっていた。三亜から黄流ま

での約100Kmをチェコ製のSLが走っている。石碌から榆林港まで鉄鉱石を運んだ線路をそのまま使っているらしい。線路のマクラ木はコンクリートに代っていた。馬嶺から約20Km、梅嶺の懷に抱かれるように“国营南濱農場”がある。西回公路から南濱農場までの道は、昔を思い出すような凸凹、砂塵濛々……。しかし、ユーカリ・ポプラ・モクマオウの並木の奥には、ゴム林が連なり、よく手入れされていた。ここは、大変な優良農場であるらしく、壁には故周恩来首相署名入りの表彰状が何枚も飾ってあった。ゴム精製工場を見学する。ここではゴム樹液を粗製ラバーにし、その殆んどを上海に送っているそうだ。一種独特な臭気の漂う工場内で「海南島産のゴムは、現在中国が必要とするゴムの3分の1を賄っている」との説明を受ける。

午前中の道を逆戻りし、西州島が見え隠れするころ、往路は気がつかった異様なものが海中に浮んでいるのを発見。海底油田調査のヤグラである。最近、島の周囲でアメリカやフランスの力を借りて、海底油田開発の調査を行っているが、これは中国の南海石油探査指導部が独自に調査しているヤグラだという。六郷村（元開拓村）を望見するあたりから西回公路と別れ、田独に抜ける。石原産業が開発していた田独鉄山の赤茶気た山肌が見えない。露天掘りの大きな山だから、すぐ判りそうなものだが……。しかしここは、だいぶ以前に閉山し、今は近くの山で硅石を切り出し、日本へも送っているとのこと。黎族の子供たちと遊びに行った田独鉄山が懐かしい。喃淋崗を過ぎると山道は急に峻しくなる。三道（旧什来ならん）から新政（旧毛文弓）は日本の兵隊が悪戦苦闘をした古戦場だが、今はゴムの木が整然と並ぶ平和なたたずまい。响水（旧大本弓）で“保亭”への道が別れる。毛坪あたりから幻の山と呼ばれる五指山（1,867m・海南島一の高山）が望める。日に映えて美しく、まるで5本の指で天を支えているようだ。毛岸に近づくと一面の茶畑である。この辺は霧の発生が多く、地形的にも気象的にも茶の生産には理想的なのだそうだ。毛岸では少数民族の一つ、苗族部落を視察。小高い部落の入口には、総出の村民が待機しており、丘の下では、海南黎族苗族自治州委員会・外事弁公室の曾海波主任が民族衣装をまとった2名の少女、符人民公社主任と共に出迎えてくれる。曾主任は、広東中山大学の出身で、通什に来る前は大陸の大都市の市長をつとめていたという。少数民族啓蒙のために通什に派遣された当時は、何処から手をつけてよいか判らぬ状態であつたらしい。以来16年、開発のために心血を注ぎ、一度も大陸には帰らず少数民族と寝食を共にしているそうだから、文字通り黎族・苗族の父ともいふべき人物である。

部落に入り、ここでも熱烈歓迎を受けた。やたらと犬が多い。これは今も昔も一つも変わらない。他部落よりの侵入者を防ぐ生活の知恵であった名残りであろう。茅葺の屋根の低い薄暗い部屋にうずくまっていた苗族が、生き生きと生業に励んでいる姿に敬意を表したい。文字通りの掘立小屋で、一間きりの土間の片隅で煮焚きし、収穫前は食べるものもなく、ピンロウやイモを噛んで飢をしのいでいた同じ民族の人々が、煉瓦建の家に住み、家財道具も整い、厨房で煮焚きし、ベッドで

寝ている。主食も紅米でなく、白米を食べていた。毛岸人民公社から15Kmほど行くと“通什”である。海南黎族苗族自治州の州都で、白石嶺・駿白嶺・昂日嶺・報馬嶺に囲まれた溪谷に、白やクリーム色の建物が重なり合って建ち並び、市街区の中央を昌化江の上流が清らかに流れている。かつての黎族の生活を知る者にとって、このような群山・溪谷にこうした美しい町ができようとは想像もできなかった。“通什鎮紅旗人民公社藩茅生産大隊”は毛岸が苗族だけの人民公社であるのに対し、ここは黎族だけの公社である。「私たちの先輩は、この世のものと思えぬ貧しい生活を送っていたし、ほとんどの人が文盲であった。農業といっても原始的な焼畑農法だったので収穫も少なく、人々はいつも野草や野生の果物で飢をしのいでいた。しかし、解放後は土地政策の改正その他で新しい農耕を学んだ。そして互助・協同化運動をくりひろげ、以前は石油ランプさえなかった奥地に電灯が付き、農業機械も使えるようになった。学齢に達した子供は今は100%小学校に通っており、中学校には進学する子も少なくない。言語も標準語のほかに海南語・民族語も認められている。昔の茅葺の家の改良が進み、現在では70%がレンガ造りの家に住んでいることを誇りに思っている」と責任者からきかされた。

事実、中国政府は少数民族に少なからず関心を払い、優遇措置を講じているようである。少数民族は、漢民族と異なる言語や習慣をもっており、旧時代には漢民族に圧迫搾取され、極端な後進性を背負わされていたが、新中国は、対等性を与えると同時に、固有の習慣や文化を維持させ、自主性も大切にしているように見える。大陸で実施している産児制限も、黎族・苗族には強制していないようだ。

夕方、広東民族学院に行き、学生諸君との交歓会にのぞむ。民族学院は、漢族をはじめ黎・苗・白・回・高山・壮など12の民族出身の学生を集め、国文・政治・数理を教科とする大学で、学生数約500名。北京に中央民族学院があり中国全土で14カ所ある。

「1月16日」(晴時々曇) 通什～海口

旅も終りに近づき、海口に戻る日がきた。昌化江の源流に沿ってバスは進む。山岳道路は白石嶺・什永嶺の中腹を縫い、尖峯嶺の奇容を左右に見ながら五指山を目指す。公館墟の部落を過ぎる辺から右手に“大五指山”の偉容が窓にうつりだすが、ここから見る五指山は通称裏側(どちらが表か不明)で、表に比べると柔和なのだそう。海南島の平野部を潤す南渡江・万泉川・昌化江はいずれもこの五指山にその源を発している。後刻、聞いた海南島の詩人邱文壮が吟じた詩を供記しておこう。

「5つの峰はみどりの5本の指を並べたように 炎天下の荒野にそびえ立ち 天の半分を支えている
 夜には銀河で身を清めて星を摘み取り 朝には大空をさぐり 雲や霧を弄(まさぐ)る
 雨あがりには竹の子と見まがう雄姿を空中に現わし 月夜には夜光玉の如き明月が 五指山の掌

に懸る　なんと巨大な仙人が腕をかざして　遙か彼方の海外より中原（大陸）に思いをよせるかのようだ」

往時は、こんな山の中に、こんな立派な道路ができるなど到底考えられぬことだった。縦断道を順調に走り、瓊中に入る。昔の営根村にあたる県委員会招待所で休憩。通訳が「あの5人の娘さんは、1人の漢族のほかは、4人とも少数民族です。当ててごらんさい」という。指定すると「ハイ、私は苗族です」「イエ、私は黎族です」と誇りに満ちたはっきりした返事がかえってきた。瓊中は、黎・苗族と共に発展した町のような。営根村は海南島のちょうど真中、臍の位置にあり、占領時代はこの辺まで日本人が足を踏み入れることは少なかった。瓊中を離れたのは、昼食も済んだ12時過ぎ。縦断山岳道を北上すると左手に五指山に次ぐ第二の山　黎母嶺が見えてくる。昌化江の上流と別れ、儋県（旧那大）への分岐点・烏石を通り楓木から“屯昌”へ。大同・新興を経由、南渡江上流に架かる“東山橋”を過ぎ、すっかり平坦となった瓊州平野を北上、左手に“馬鞍山”が見えはじめると、もう海口は近い。澄邁・儋県（那大）への分岐点は、ちょうど秀英になる。通い馴れた秀英道路を海岸に沿って東進すると海口市内。海口では市椰彫工藝庁を訪問し、椰子細工製作工場を見学した。ここでは日本へ送るという珠数玉を磨いている。菩提樹の珠数として高価に売られているのは、実は籐の実と知って呆然とさせられた。終りにあたって海口市内を寸描させていただく。かって市内ではあまり見られなかった椰子も、今では街路樹として至る所で高く聳えている。旧市内は新街区と異り、見覚えのある町並が続く。大英山には、解放記念塔が建ち、新興路に入ると、臨時政府・台拓バス停から市政府にかけてと思われる所に大きなロータリーが作られ、“毛沢東思想普及塔”が建っている。夕暮れの迫る市内は勤め帰りの人々の雑踏…。新興路から得勝路に入る。旧正金銀行は海口海関（税関）として現存していた。特務部付近のたたずまいは一つも変らず薬種公司が入っており、陸軍司令部の建物は、中国人民銀行海口支店の看板が掲げてあった。15警本部・海軍病院は芝生に囲まれた海口中央病院となり、島民医療の中枢になっているようである。ただ、特務部裏側には南渡江に沿って新たに自動車道が出来ていた。この道路を市街地に戻ると、海口のシンボルともいえる“時計台”があり、往時と同じ時を刻みながら、まさに転た世の遷り変りを見下ろしているようであった。

※「黒潮会」は昭和20年、日本の敗戦まで存在した「海南師範学校」の卒業生を中心にしてつくられている会。

同会の関係者19人は同島外事弁公室の招きで、今年1月に約1週間の日程で海南島各地を友好訪問した。

海外農業開発 第76号 1981. 12. 15

発行人 社団法人 海外農業開発協会 岩田 喜雄 編集人 小林 一彦

〒107 東京都港区赤坂8-10-32 アジア会館

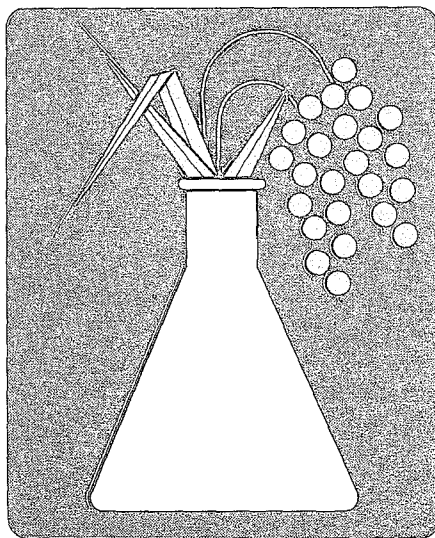
TEL (03)478-3508

定価 1,500円 年間購読料 1,200円 送料共

印刷所 日本軽印刷工業(株) (833)6971

ユーザーの声を1つ1つカタチに。。。

わが国初の合成農薬として燻蒸殺虫剤クロルピクリン(コクゾール)を誕生させたのは大正10年。あの日から56年、三共は数々の製品をおくり出し、皆さまのご期待にこたえつづけてきました。そのかず250品目以上。"使って安心 三共農薬"をスローガンに、こんごも三共はすぐれた農薬の開発に努力をつづけます。



◎健苗育成に

タチガレン[®] 液剤
(TACHIGAREN)

◎茶・花木・みかんの同時防除
野菜・タバコの土壌害虫に

カルホス[®] 乳剤
(KARPHOS)

◎ススキ(カヤ)・ササの抑制・枯殺に

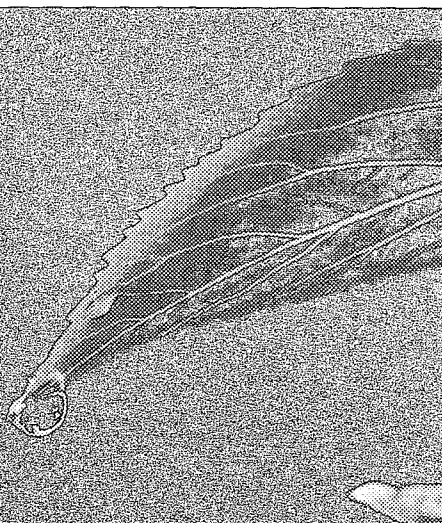
フレノック[®] 粒剤
(FRENOCK)



三共株式会社

農薬営業部 東京都中央区銀座2-7-12
支店 仙台・名古屋・大阪・広島・高松

大きな夢を育てたい。



《日債銀》は、みなさまの有利な財産づくりのお役に立つワリシン・リッシンを発行しています。また、産業からご家庭まで安定した長期資金を供給することによって、明日のゆたかな社会づくりに貢献しています。

高利回りの1年貯蓄

ワリシン

高利回りの5年貯蓄

リッシン

日本債券信用銀行

本店/東京都千代田区九段北1-13 ☎102 ☎263-1111
支店/札幌・仙台・東京・新宿・渋谷・横浜・金沢
名古屋・京都・大阪・梅田・広島・高松・福岡
ロンドン・ニューヨーク支店/駐在員事務所: ロサンゼルス・ペイロート・フランクフルト

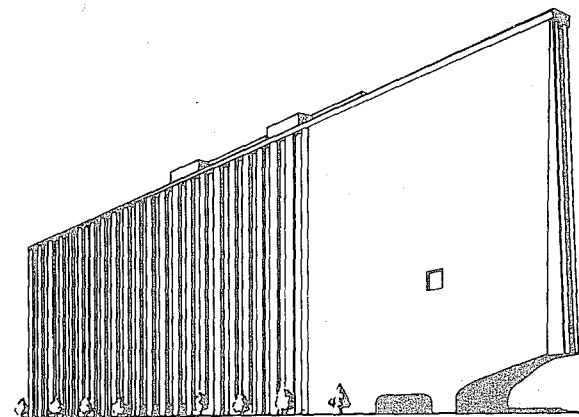
(どちらの〈富士〉を
ご利用ですか。)

全国に、210余の〈富士〉。
これらを結ぶ、大きなネットワークをバックに
ひとつひとつの〈富士〉は
地元に着した活動を行っています。
たとえば、金融サービスをはじめ
時代に即した事業経営のアドバイスなど
さまざまな情報の提供も。
経営の多様化にお応えする
〈富士〉の多角的なサービス
をご利用ください。



豊かな明日を考える興銀

最新の情報をもとにして、産業
の発展、資源開発、公害のない
都市づくりなど、より豊かな明
日への実現に努力してゆきたい
と考えています。



リツキー ワリコー **日本興業銀行**

〔本店〕東京都千代田区丸の内1-3-3 ☎03(214)1111

〔支店〕札幌・仙台・福島・東京・新宿・渋谷・横浜・静岡・名古屋・新潟・富山・京都・大阪・梅田・神戸・広島・高松・福岡

海外農業開発 第 76 号

第 3 種郵便物認可 昭和56年12月15日発行

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

87